

# サヴォナローラの時代、生涯、思想（十五）

須藤 祐孝

## 目次

- I ルネサンス・フェッラーラ、フィレンツェ、そしてイタリア
  - i ニッコロ三世の統治期（1402-41） 一四九号
  - ii レオネッロの統治期（1441-50） 一七三号
  - iii ボルソの統治期（1450-71） 一四五号
  - iv エルコレ一世の統治期（1471-1505） 一四九号
- II サヴォナローラ本家、分家と分家家長・祖父ミケーレ 一七三号
- III 誕生、そして旅立ち
- IV 〈出家〉―「イエス・キリストの騎士」「戦う騎士」へ、  
「肉体の医師」から「魂の医師」へ 一八二号
- V 〈天啓〉、そして〈政治的〉修道士の胎動 一八三号
- VI 強まる〈政治的〉修道士の胎動 一八八号
- VII 志―原初の教会の再生―、忍び入る政治の〈魔性〉  
「運命の一四九四年」(I)―メデイチ体制の崩壊、  
フィレンツェ外交の前面へ 一八九号
- VIII 「運命の一四九四年」(I)―メデイチ体制の崩壊、  
フィレンツェ外交の前面へ 一九一号

- IX 「運命の一四九四年」(2) — (政治的) 修道士の誕生、フィレンツェ政治の中心へ、フィレンツェを「神の都」に 一九二号
- X 「大評議会」、(サヴォナローラ共和制)  
— 「神の都」の統治構造、最上層に立つ熾天使代行人 一九五号
- XI 強まる内外の敵の攻勢(1) — 「信仰心無き者たち」非難、最高指導者の高揚、動揺、不安 一九八号
- XII 強まる内外の敵の攻勢(2) — 教皇アレクサンデル六世前面へ、せまる  
「大きな危機」 二〇一号
- XIII 激震の前兆(1) — 「このアモス」(II (現在のアモス)) の叫び 二〇五号
- XIV 激震の前兆(2) — 消える(光輪)、始まる運命の下降、強まる危機感 二〇六号
- XV 破門 — 「異端」による、ではなく「不服従」による 本号



## XV 破門 — 「異端」による、ではなく「不服従」による

九七年は、サヴォナローラにとって、いうならば運命の急降下の始まりの年となる。当初、彼はまさにフィレンツェの最高権威的存在だった。運命はまだその頂点近くにあった。

人間の生き方、日々の有りようの改革、すなわちあらゆる面で原初の教会の時代への回帰という彼の主張が、色々の面で法制化された。彼の支持派への非難、攻撃は厳しく処罰された。特に、横行していた各種の賭け事や男色は厳罰に処された。女性や年少者たちの化粧や服装についても細かく規制された。これに人々は、不満

を覚えながらも、表面上は服さざるを得なかった。

しかし、彼の教説を受け入れた純真な年少者たちには、彼の威力は内心深くまで浸透し、強い影響を与えていた。

二年前、九月と一〇月の二度の勅書で説教を禁止された後、サヴォナローラは密かに「子供たちの改革」に努めていたようだ。ただし実際にその推進にあたっていたのは、自分が院長に就任した当初から信頼し、「政庁」から特に要請された説教を自分に代わって説教をさせるなどしていた修道士ドメニコ・ダ・ペーシヤだった（参照、↓前章、VII章）。反対派のアツラッピアーティ（「憤激派、参照、↓XI章」）からは、サヴォナローラの「アホな下役」と軽蔑されていたというこの修道士は、サヴォナローラに代わって大人たちへの説教を行ないながら、おそらくは自分の師とも言うべきサヴォナローラの意志をくんで、子供たちの、特に悪習に染まり放縦な遊びにふけていた子供たちの教化にも励んでいた。

同時に、市内の四つの街区ごとにサヴォナローラ少年団とも言うべき組織を作り、かつその組織を子供たちに自主的に運営させ、その中で子供たちに日々の暮らし、言動を自主的に改めさせようとしていた。無論、子供たちを通してそれぞれの街区の大人たちの教化も深めようとしていたのだろう。

子供たちの教化は、かなり浸透したようだ。これまで当然のごとく行なわれていた二つの遊びのうち一つは見られなくなり、一つは喜捨のための遊びに変わったという。すなわち、相手と石をぶつけ合い死者も生んでいた「石投げ遊び」は見られなくなった。街路を棒状のものでふさぎ、通行人から金を取り上げ、その金で遊蕩にふけていた「棒遊び」は、そこで得た金を教会の寄進用壺に入れるものに変えたという。<sup>1)</sup>こうした子供たちの変化は、（後でふれるが）サヴォナローラ自身が説教を許されるとすぐその中で示唆するほどになって

いた。

この変化の最初の、そして典型的な現われが、いわゆる「虚飾の焼却」〔= bruciamento delle vanità〕だ。二月七日、市の中心、政庁宮広場に、ピラミッド形の木製の建造物が現われた。八面を持ち、各面に階段が造られていた。その各段に、少年たちがそれぞれの街区の家々を回わって没収した「呪われた品々」〔= anatemi〕、言いかえれば「虚飾の品々」——と彼らがみなした物——、すなわち絵画、本、楽器リュート、髪飾り、化粧品、香水、鏡（姿見）、人形、トランプなどのカード、ダイス（さいころ）、賭け事の盤、などが整然と並べられた。そこに、サン・マルコ修道院の広場で隊列を組んでいた四街区の少年隊が登場し、聖歌を歌い始めた。同時に、木製ピラミッドに火がつけられ、「呪われた品々」が、「虚飾」が燃やされ始めた。燃え尽きるまで少年隊の歌唱が続いた。<sup>2)</sup>

こうしたことが翌年にも行なわれて、多くの価値ある文学作品——（その中にはポツカッチオの俗語すなわち当時のトスカーナ語による『デカメロン』も含まれていたという）——や芸術作品などまで一方的に「呪われた」ものと断定され、焼却された。少年隊に断定、没収されるまでもなく、自らの作品を、あるいは所有品を「虚飾」と判断し焼却あるいは破壊した者たちもいたという。サヴォナローラに傾倒した画家ポツティチェッリもその一人だったとも言われるが、信憑性は疑われている。ただしこのことは別にしても、この頃の彼の作品は、素人が見てもそれ以前の作品とはかなり違っており、彼が内心でサヴォナローラの影響を受けていたのは事実だったように感じられる。<sup>3)</sup>

これらの結果、唱導者サヴォナローラは、いわば文化破壊者とみなされ非難されてもきた。しかし他方で、本稿で早くからしばしば参照してきたヴィツラリは、彼は古典、古い絵画、彫刻の「野蛮な破壊者」と見なさ

れてきたけれども、これらの、とりわけ古典の擁護者だったと強調している。彼によると、サヴォナローラは、古いギリシア語およびラテン語の写本を驚くべきほど多量に収集し保存した。そのため、修道院にある金を使い、あるいは写本の一部を抵当にして多額の借金をしていたという。こうして保存されたものは、現代まで受け継がれ、世界で唯一のものとしてフィレンツェの複数の伝統的図書館に保存されているという。つまり、彼は古典など古き文化の保護者でもあったというのである。<sup>(4)</sup>

第一回目の「虚飾の焼却」の翌八日、サヴォナローラは大聖堂の説教段に上がった。説教の表題は、「詩篇」一四四篇の冒頭の言葉、「戦<sup>つく</sup>ずることをわが手にをしへ……たまふわが磐<sup>い</sup>エホバ（「イヤハウエ」神）」はほむべきかな（「わが岩なる主はほむべきかな。主は、いくさすることをわが手に教え、……」）である。

なぜこの表題を採ったのかを知るには、またこの表題の説教の内容を理解するにも、旧約聖書の中でもこの「詩篇」についての、またこれの中に、あるいはその背景に登場する人物についての若干の基礎的知識が必要である。

——イスラエルの一二氏族のそれぞれに、神の声を聴き、それを民に伝えて民を導く預言者でありかつ指導者である士師（「Judice」裁<sup>さ</sup>き司<sup>つか</sup>）がいた。その最後の士師となったサムエルは、全氏族の中から「神の名において」（「神に代わって」）サウルを王として選び、彼に全氏族を統治させることよってイスラエルに王制をもたらした。しかし間もなく、自分のように神の言葉に絶対的に従おうとはしない、いうならば現実的なサウルと対立し、自分の後継者には羊飼いをしていたダヴィデを、神に代わって選んだ。このダヴィデに導かれてイスラエルの国家は確立された。<sup>(6)</sup>

このプロセスを、すべて神による選びに、神の摂理に基づくものと意味づけているのが旧約聖書の「サムエル記」である。

これによると、サムエルがイスラエルの全氏族を統べる一人の王を設けようとしたのは、地中海岸に定着してイスラエルを攻撃してきたペリシテ人を撃退するためには、全氏族を統率する王が必要ではないか、と感じたからだ。初代王サウルのイスラエル軍隊は、ペリシテ人の軍勢に勝ち続けた。軍の中心で抜きん出た働きをしたのが、羊飼いだヴィデだった。やがてだヴィデは民衆の圧倒的崇敬を得てサウルの後を継ぐイスラエル王となった。

こうしてだヴィデは、サムエルの後継者にしてサウルの後継者、すなわち預言者にして現実の世の王となり、イスラエル国家を確立した。

だヴィデが最初に王サウルのイスラエル軍の代表的戦士として戦った相手、すなわちペリシテ人の軍の代表的戦士は、巨漢ゴリアト(「ゴリアテ」)だった。青銅の兜をかぶり、鎧を身にまとい、長大な槍を手にしたこの巨漢戦士を見て、イスラエルの軍勢は恐れおののいた。彼がイスラエル軍を代表する戦士との一騎討ちを求めると、だヴィデが名乗り出た。王サウルは、年少な彼に勝ち味はないと彼をいさめ、しりぞけた。

しかしだヴィデは王に言った。羊飼いをしていた時、羊を襲ってきた獅や熊を討ちとって羊を守ったのだが、これを自分に成させた。「主は、またわたしをこのペリシテ人の手から救い出されるでしょう」。そこでサウルは彼に行けと言ひ、兜、戦闘服、鎧をわたした。彼はそれらを身につけようとしたが不慣れでできないためすべて「脱ぎすて、手につえをとり、谷間からなめらかな石五個を選びとって自分の持っている羊飼いの袋に入れ、手に石投げを執って」ゴリアトに近づいた。

ゴリアトはダヴィデを「侮あなごつて」、「さあ向かってこい。おまえの肉を、空の鳥、野の獣のえじきにしてくれよう」と豪語した。それに対してダヴィデは、言った。――「おまえはつるぎと、やりと、投げやりを持ってわたしに向かってくるが、わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいどんだイスラエルの軍の神の名によって「||神に代わって」おまえに立ち向かう。きょう、主は、おまえを私の手「|| potare ||力」にわたされるであらう。わたしは、おまえを撃って、首をはね」、お前もお前のペリシテ人軍勢の「死かばね」も「空の鳥、地の野獣のえじきにし、イスラエルに神がおられることを全地に知らせよう」。……「この戦いは主の戦いであって、主がわれわれの手におまえたちを渡されるからである」。

近づいてきて自分の前に立ちはだかったゴリアトに向かい、「ダヴィデは手を袋に入れて、その中から一つの石を取り、石投げで投げて、ペリシテびと「||ゴリアト」の額を撃ったので、石はその額に突き入り、うつむき地に倒れた」。ダヴィデは剣を持たなかつたのでゴリアトに走り寄って剣を奪い、それでもって彼の首をはね、殺した。……その様を見たペリシテ軍は敗走した。（以上、「サムエル記 上」17）

いささか長すぎるかとは思いつつも「サムエル記」をたどってきたのは、「詩篇」一四四篇の冒頭から表題を採った今回の説教におけるサヴォナローラの叫びそのものの内容は、「詩篇」よりもこの「サムエル記 上」17に基づいているからである。

そうでありながら、彼は説教のタイトルを「詩篇」の一四四篇から引いている。そもそも「詩篇」全一五五篇は「ダヴィデの詩篇」とも言われ、特に『ダヴィデの詩』の表題を持つ一三八―一四五編は、一つのまとまった詩集（『ダヴィデ詩集』）と見なすことができる」と言われている。<sup>(1)</sup>

強敵を打ち破ったダヴィデが、冒頭で「わが磐いなる主」として神を讃え、その神に「私を」「異邦人の手」から、

「残念なつるぎから」「助け出してください」とくり返し願っているこの一四四篇には、この時点でのサヴォナローラの内心の叫びがこもっていたのではないか。それゆえ彼は、自然に、説教のタイトルとしてこの篇の冒頭の句を引いたのではないか、と思われる。

ここからこの説教の内容に入ってみよう。

いつものように一般論をさり気なく述べながら聴衆に訴えて、いや命じていく。――「真理に従って歩む者は神に従うと同じだ。神は真理であるゆえ、「従う」その者の中に在り、その者は神の中に在るからだ。したがってその者が勝利するのは不思議なことではない。」「だから自分は、真理に従って歩むよう汝らを励ましてきたのだ。我々、――「とまさにいつもの話法で」――ここまで常に勝利してきた。そしてなお戦わなければならぬが勝利するだろう。しかしまず初めに神に感謝の歌を捧げよう。その後、我々を助けて下さるよう神に祈願しよう。我々はなお戦わなければならないからだ」。(傍点は引用者)

重ねて言う。――「汝らは皆、私が何度も言ってきたこと、すなわち、我々は戦おう、そして勝とうと願っているということ覚えておもう。私は七年間こうしてきたし、なおしていくだろう。――「七年間」というのは、彼がフィレンツェに定着した九〇年からということだが、それでもまだまだこの戦いを続けねばならない状態にあることを強調しながら彼は続ける。――こう言うと汝らは、「ああ、お前は何かひどい目にあうぞ!」と言うだろうが、気にするな! 我々はいずれとにかく勝つだろう」。

自分が追いつめられていることを認めながら、そしてその事実をすでに認知している聴衆を「我々はいずれとにかく勝つだろう」と鼓舞しながら、おそらくは自分をも鼓舞していたのだろう。

次いで唐突に、「この詩篇は」と表題の「詩篇」一四四篇に返って言う。――「ゴリアトに向かいて、と題されているが、それは神の民に向かつて戦いを仕かけてきたゴリアトに向かつて創られたものだからだ」。この傲岸な巨漢ゴリアトは、「今や我々にも戦いを仕かけてきている。野では嘘が真理を挑発し、悪業が善行を、傲慢が謙遜を挑発し、悪魔がキリストをおおっている。さあ、今やダヴィデが、「神の」強き手に向かつて行く、そして勝つだろう」。これは、他でもない「キリストが我々とともに在る」ということだ。「我々はサウルの武器（「サウルがダヴィデに与えようとした武器」）で、すなわち古い掟どおりの諸々の儀式や美辞麗句で戦おうとは思わない。真理そのものでもって戦おうと思う。我々もダヴィデ同様、五個の石をとり川に行こう。……我々は聖書も手にとろう。聖書は〔今は〕尊重されていないがゆえに川に、水面下に隠されているからだ」。……「汝らを知つてのとおり、我々は一個の石（「聖書」）だけで勝利してきた。ゴリアトよ、我々に向かつて来るな。もし私がもう一個の石を手にとったら、それをお前の額に投げつけてお前を永久に狂わせるだろう。……さあゴリアトよ、これからお前に言うことを聴け」。――すぐ前で見えた「サムエル記 上」を情況に合わせて巧みに聴衆に語って聞かせながら、ゴリアトに挑み、命じている。

しかしまたすぐ聴衆に言う。――「汝らはひどくおびえている。汝らに言うが、我々は諸々の武器のうちの半分を（川から）掘り出したただけだ。必要とあらばあらゆるものを掘り出そう。さあ、詩篇にもどうだろう。神の御加護を願おう。言っておくが私は我が神の御加護を願っている」。

そしてゴリアトに言う。――「さあ来いゴリアト、お前の神は何なのだ？ 哲学者たちが言うように、第一動因（「神」とは、単純明快、あらゆるものを動かすもののだが、お前を動かしているものを、お前は何に従っているのかをよく見てみる）。情欲、金、銀、カネ、野心、暴飲暴食、これらがお前を動かしている「お前の神」

ではないか。それゆえお前は「第一動因である」神の加護を願うことなどできない。

一体、このゴリアトとは、誰なのか？ 聴衆は誰しも容易に分かったことだろう。ゴリアトとは教皇アレクサンデル六世なのだ、サヴォナローラは今やダヴィデとして教皇ゴリアトに向かおうとしているのだ、と。サヴォナローラと彼を信じ彼に依り頼む自分たちは神とともに在り、神の加護を得られるが、教皇ゴリアトは神の加護を得られないから、「我々はいずれ勝つだろう」と彼は言っているのだ、と。——改めて言うまでもなく、サヴォナローラはここでは自分をダヴィデと重ね合わせ、自分を「現在のダヴィデ」と感得させようとしている。

彼の言うことを分かった上で聴衆はそう信じたかどうか。信じたとしても、この中のどれほどの者がどれほど信じたのか？ こうした疑問、不安を彼は覚えていたのだろう。

すぐ言い続ける。——神は、演奏家が自分の知性と両手に教えているのと同様、人間の知性にだけでなく両手に、両指に教えて下さっている。右手に神は、「今は痛めつけられている真理でもって戦えと教えて下さった。このようにして、良き（「正しい」）生き方と真理の諸々の働きでもって戦え、そして悪魔とその一党を痛めつけよと教えて下さった。神は左手でも戦えと教えて下さった。左手は目立たないが諸々の災難における忍耐と陽気の表われであり」、……「その殴打は敵の剣に打撃を与え、顔面に衝撃を与える」ものなのだ。

右手の五本の指には「敵を説得する諸々の理性」が表われている。その小指には「生来の小さな理性」が、次の長い指には神から与えられたより大きな「信仰の光」が、次の一番長い指には神から与えられた一番大きな光が、次の指には「聖書が説き明かす光」が表われ、最後の「剣を強く握りとめる他の指には、正しい生き方の光」が表われているが、これは「正しい生き方には他の何ものにも増して説得する力があるからだ」。総

じて「これらの指は敵たちに勝つ指である」。——右手の指は、「正しく生きる」ことによって勝利することを教えてくれている、と言っていたのではなからうか。

左手の指には、まず小指に謙遜が、次の指に忍耐が、次の中指に「我々を抹殺するための迫害と策略」が、次の指に「我々が体内に有している災いと苦悩の種」が表われ、最後の、「あらゆる物を強く握りしめる」指に表われているのは「殉教だろ」。——左手の指が教えているのは、神の前で控えめに苦難を耐え忍びながら生きても、この世には迫害や策略が絶えず、加えて我々人間の内部には災いや苦悩の種が絶えず、最後には「殉教が」我々を待っているということだ、と彼は言っていたのではなからうか。

こう言いながら、彼はさらに、自分は「殉教」を見ずえている、「殉教」の覚悟ができていると聴衆に示唆していたのではなからうか。

仮にそうだったとしても、彼は自分たちの敗北を告げていたのではなかった。有りがたいことに、と叫び続ける。——神は我々に非常に良く教えて下さっている。「しかし、汝フイレンツェは正しく行動しなかったため敵に包囲された。「それなのに」どうして汝は敵どもに勝ったのか？ 主なる神が汝に慈悲を与えて下さったからだ。汝の力量「II HUIUS」によって勝ったのではない。言っておくが、主が汝を救って下さったのだ」。これが、「これまで我々が戦いで救われてきた」要因だ。「しかし、今や新たな戦いに入らねばならないので主に祈願せねばならない」。……「我々全員、心は一つ、魂は一つだ。主「なる神」に祈願しよう」。

何を祈願するのか、せねばならないのか？ 敵どもへの神罰を、である。——「邪悪な高位聖職者たちが、聖職者が、邪悪な修道士たちがおり、万事が腐っておりませう」ので、「主よ、降りて来て下さい。来て下さい」。……「主のお力で天使たちを下界に送って下さり」、天使たちが「これら邪悪な者たちを罰することができます

ようになさって下さい」。……「砲弾を、ペストを、飢饉を送ってこれら邪悪な者たちを一掃なさって下さい」。  
 ……「主よ、私たちをこれらティエビディ〔「真の信仰心無き者たち」から、邪悪な者たちから救って下さい。この者たちが二度と真理に逆らい、正しい生き方に逆らって悪口をばらまくことができないようになさって下さい」。

ここでは、祈願する神罰の対象を、ローマの高位聖職者たちをはじめとする聖職者全体に加えて、自分サヴォナローラの「悪口を」フィレンツェの内外に「ばらまく」市内の敵ティエビディにまで広げている。そしてこれらすべてを「一掃」して下さるよう神に祈らねばならない、とはつきり命じている。しかも、「砲弾、ペスト、飢饉」という、当時のイタリヤで最も悲惨な、残酷な事態をひき起こしていた三大要因を駆使して抹殺して下さるよう神に祈らねばならない、と命じている。

「おお、修道士よ」と、聴衆が自分に問おうとしているかもしれないことを自分で発して自分で答えるという、いつもの話法で叫ぶ。――「お前は戦闘を、災いを招くのか？ 汝らもこれらを招くことだ。汝らが〔彼ら邪悪な敵どもへの〕慈悲を祈願することがなければ、〔彼らには神の〕裁き〔「iustitia」〕が、力〔「potenzia」〕が下るのだ。いずれにせよ奴らは悪魔の家〔「地獄」〕に行くことになるだろう。さあ、主は我々とともに在るのだ」。

彼の言う「真理」に、「正しい生き方」に逆らう者たちを地獄に落とす神罰を共に祈願せよという、徹底した敵・味方思考が、これまでの彼の多くの説教にも増してあらわになっている。一年前も、ティエビディは地獄に落ちる他ない、いや落とすべきだと宣告していた。しかし、そうしてくれるよう神に祈願せねばならないと聴衆に命ずるまでには、なっていなかった（参照、↓VII章）。しかしここでは、汝らもそう祈願すれば奴ら

敵は地獄に落ちるからそうせねばならない、とはつきり命じている。

これは、自分がこれまでも増してひどく追いつめられているという危機意識が、彼の内心でこれまでになく強くなっていることの表われではあるだろう。だが見方を少し変えて言うなら、信仰が、あるいはより一般化して言うなら宗教が、ある究極の情況に至れば人間に否応なく発露させる本性、より端的に言うなら信仰・宗教の究極の本性の表われと言えるのではないか。あるいは、信仰・宗教を内心の核とした、してしまった時の人間の究極の本性の表われとも言えるのではないか。……そうであるならば、サヴォナローラのこうした言説をもって彼の人間的、人格的特性を、さらには異常性を語るのは、少なくともここでのみ彼の言説の要因を求めるのは適切ではない、と言わねばならないことになるだろう。

ともあれ、さらに続けて発する言葉に、サヴォナローラの思考の根幹が表われる。――「我々と共に在る」神に「良いこと」を約束しなければならぬ。何を約束？ 様々なことを言いながら結局はこれまでくり返し言い続けてきたことに行き着く。――「とにかく正しく生きることが心を心がけよう」。こうした生き方をして「霊的なことを、永遠のことを瞑想せよ。この瞑想によって汝はこの世にではなくこの世を超えた所に在ることになる」。

そうなつて、どうするのか？ 「質素になれば、原初の教会の人が在ったように汝を改めよ。諸々の憎悪を捨てよ、汝を革新せよ。誰もがキリストを敬うのだ」。――サヴォナローラにとって「革新」とは、変わらず原初の教会への、その時代への回帰である。（参照、↓XI章、VII章）

最後に彼は前夜の「虚飾の焼却」を語りながら命ずる。――「子供たちは古い詩を捨て、多くの古いものを取り上げ焼いた。そして新たな詩を歌い始めた。……女たちよ、身につけているそんな虚しいものを、醜い装

いを捨てよ、すべて火に投げ入れるのを私がキリストに代わって許してやる」。

ここに挙げた二つの文章には、「虚飾の焼却」の思想的根拠とも言うべきことが表明されている。イエスに接し、イエスを神として崇め、イエスに依り頼んで生きた使徒たちのようであれ、あるいはその者たちを直接、知り、その者たちに学んだ者たちのようであれ。そうであることに沿わないような、それを妨げるような事物はすべて虚しく、醜いもの、古いもの、焼却されるべきものだ、というのである。

五日後の一三日の、「エホバの栄光かくのごとく見ゆ」をタイトルとする説教では、イスラエル王国の崩壊とそこに至る時期の二人の預言者、エレミアとエゼキエールについて語りながらローマの「首領」の「罪」を弾劾し、その下にある教会の惨状を語りながらローマへの、イタリアへの神罰の必然性を語る。語りながら、自身をエゼキエールに重ね合わせる。

この説教を理解するには、まず、前に見たダヴィデが築いたイスラエル王国の歩みの大筋を見ておく必要がある。

この王国は発足後八〇年たらずして北のイスラエル王国と南のユダ王国に分裂し（紀元前一〇世紀）、二〇〇年ほどして前者が滅び、それから一五〇年たらず後の紀元前五八七ないし六年、エルサレムが破壊されて後者も滅び、イスラエルの民は「バビロン捕囚」の身となった。

北と南の王国の滅亡の間の紀元前七世紀にエレミヤが、北の王国の滅亡を預言し警告を発していて、南のイスラエル王国については滅亡の直前にエゼキエールがそれを預言し警告していた、とされている。サヴォナローラによれば、「我らがエゼキエールはエルサレムの迫害と破壊の六年前に預言を始めた」。

こうしてエゼキエーレは捕囚となった人々の中にいた。「エゼキエーレ書」第一章によれば、彼の前に「神の幻」〔「visione」〕が顕われ、彼に言葉を託し、命じた。―「主なる神はこう言われる」とイスラエルの民に伝えよ。自分にそむいて捕囚の身となった「反逆の民」に伝えよ、彼らが「聞いても、拒んでも」……こわがらず、彼らの言葉をこわがらず、彼らの顔をはばかり、ただ私の言葉を伝えねばならない」と語った。

サヴォナローラは、このエゼキエーレの役割を自分が今、ルネサンス・イタリアで、フィレンツェではたしているのだ、いや自分は、現在のエゼキエーレなのだ、前年に続いてこの説教でも人々に感得させようとしている。エゼキエーレが、イスラエルの民が捕囚の身となるわずか「六年前に」預言を始めたように、自分は六年前からフィレンツェで説教を始め、今、イタリアに神罰が下る直前でそれを預言し警告しているのだ、と聴衆に感得させようとしている。

イタリアは「倫理の熱病」におかされている、そして「徐々に憔悴している、後は、突如、大崩壊に至るだろう」。この事態は、かつてのイスラエルの状態そのものだと暗示しながら彼は言う。

ローマに行ってみろ、特にその首領〔「capo」〕をよく見てみる、ローマのどこにでも行ってみる、人はおよそ恥というものを知らずにいる。ありとあらゆる悪を公然と行ない、真理を公然と強圧している。響くわをはめられるのをいやがり、はめようとする者を蹴飛ばす若馬のように、何も聴こうとせず、真理を語る者を強圧している。

それゆえ神は言っている。「預言者が言っているのではない」。今ここでは自分サヴォナローラが言っているけれども、「神が言っているから自分は言っているのだ」。「イタリアに罰を下そうと思う。他に手だては何もない」。……また「神は言っている。私が住んでいた家〔教会〕は実に腹立たしい有りさまになり、邪悪な者で、極悪人で満ちている。だから、エゼキエーレよ、今、汝をこれら悪人たちと戦うためにも送るのだ」。

このエゼキエーレとはサヴォナローラ自身だとしか聴衆には受け取りようがなかっただろう。神は、今のイタリアのエゼキエーレとしてサヴォナローラを送って下さった、彼は、現在のエゼキエーレだと、無意識に感得していただろう。——彼が、前年一月末日の説教（参照、↓前章）におけるよりも一層、明確に自身を、現在のエゼキエーレだと明言していたからである。しかも、ローマの「首領」すなわち教皇らと戦わせるために神が送ってきたエゼキエーレだと断言していたからである。

その上で語り続ける。——司祭、修道士、高位聖職者たちに恐れてはならない。「良心を揺るがせるな。今日、彼らの風評はキリストの名を汚している」、……「教会を傷つけている。……彼らはキリストを信仰する心を抱いていない。奴らはすべての女たちの、子供たちの、この世のすべての凌辱者、破壊者だ、聖人たちの虐待者だ」。……「イタリアよ、私は汝に言う。フィレンツェよ、私は汝に言う。終末が近いぞ」。

このようにこの説教をたどってくると、これは、もう彼自身についての危機感の域を超えた次元で生じた怒りから発している、すでに核心まで頹廢しきっている時代情況に対する心底からの怒り、憤りから発している、と思えてくる。

実際、頹廢は止まることなく深まっていた。というのも、前年九六年末近くからこの九七年初めに、六四、五歳になる教皇に男子、ジオヴァンニ・ボルジアが生まれたと言われ、相手の女性は教会関係者ではな

いだろうが不明だとも言われていたからである。そしてこれが、常に独自のルートを通じて教皇庁の内情を知らされていた彼サヴォナローラの耳にも入り、彼の言葉を過激化させていたのではないかと言われてきているからである。<sup>(9)</sup>

教皇庁内部では、不品行、乱行、遊蕩、淫乱、同性愛などが止まることなくはびこっていた。なかでも、教皇自身をはじめとする一族の淫乱は、近親相姦を含めてはなはだしかった。相手は不明と言われても不思議に思われないほど乱脈をきわめていた。しかもそこに、一族間の聖俗両世界をまたぐ権力闘争もからんでいた。彼らに「キリストを信仰する心など……ない」と、サヴォナローラならずとも憤っても不思議ではなかった。また彼の信奉者、崇敬者たちが彼の叫びに揺さぶられ、神罰に近い、「終末に近い」と心底から恐れおののいたとしても、不思議ではなかった。

しかし彼の言説の過激化には、もう一つの要因、社会的・政治的要因があった。反フランス神聖同盟陣営との戦争状態が止まらない中、近郊農村地域の荒廃が進み、市内の食料不足が深刻化し、餓死者が目に見えて増えていた。フランス王が、かつてサヴォナローラが言っていたように「神の遣い」としてやって来る兆しは一向に見えなかった。神は「我々」の側にいる、「いずれ我々は勝つ」と語り続ける彼への信望は、彼の叫びの聞こえないところで、民衆の意識、無意識の両次元で弱まり、あるいは減っていた。こうした情況を感じし見聞するほどに、サヴォナローラの言葉は激しくなった。特に教皇を中心とする同盟側に対する、とりわけその中心、神にそむく教皇一族や高位聖職者に対する非難、弾劾は激しくなった。<sup>(10)</sup> いやならざるを得なかった。それ以外、彼には手だてがなかったからだ。

しかも、この二月末、サヴォナローラには、かつ、加えてフィレンツェにも、衝撃の一大事が生じた。二五日、彼の年来の「光輪」フランス王シャルル八世が、反フランス神聖同盟と休戦協定を結んだのだ。<sup>①</sup> もはや「光輪」は、王がイタリアに現われる可能性がなくなったがゆえに消えた時（参照、↓前章）とは違い、いうならば王自身によってこわされ捨てられたのだ。サヴォナローラも、そしてフィレンツェも、王に捨てられ、孤立してしまった。

彼は、人間は信頼できない、「我々が頼れるのは神にのみだ」と言って情況に耐えながら、王シャルル八世個人のことは、「愚かで取るに足らない人間だと書いていた」、と当時の年代記者パレンティは記述している。<sup>②</sup>

しかしこれが事実だったのかどうかは、確かめようがない。というのも、パレンティは、この言葉をサヴォナローラが何に、あるいは誰に書いていたのかを書き残していないからだ。加えて、これまで本論でくり返し参照してきた当時の年代記者や歴史家たちは、こうしたことを書き残していないからだ。加えて、伝えられているこの時期の彼の説教——王の神聖同盟加入の翌二六日から二八日までの三回、三月一日から二七日の間の二四回、および五月四日の一回、計二八回の説教——のいずれにも、フランス王への、少なくともも直接的な言及は見られないからだ。（なお三月二八日から五月三日まで、彼は、すぐ後で見るといって説教を行なわなかった。行なえなかった。）

こうした限定の範囲内で言うなら、すなわち、仮にサヴォナローラが、少し前には「神の遣い」だと賞揚していた人間、人々には神の意志の実現者のように説いてきた人間、さらには自分の神性を保証する「光輪」のように掲げてきた人間を、突然、「愚かで取るに足らない」奴だと書き捨てただけだったとするなら、サヴォ

ナローラ自身が小さく哀れな人間と化してしまおうように思える。

これまで見てきた彼の論調を基にして言うなら、なぜこの時、王を、神の意志に反し神の意志を踏みにする人間だと説教で、公衆の前で堂々と非難し、こういう者には神罰が必ず下る、こういう者は「悪魔の家」「地獄」に落とされること必定だと宣言しなかったのか？ さらに言うなら、こういう者を「神の遣い」だとみなした自分の不明を認め、詫びなかったのか？

ただし、彼は「私信」の中では心中を吐露していた。常に彼に好意的だった故郷フェッラーラの公エルコレ一世デステは、フランス王が教皇中心の同盟に屈して協定を結んだとの報が広まると、すぐ、この事態にサヴォナローラはどう対処するのか尋ねよと、フィレンツェ駐在の自分の大使に指示していた。この問いに対し、サヴォナローラは三月七日、短かな返書<sup>(1)</sup>を公に送った。協定締結の一〇日後のことである。王は「だまされています。……それゆえ彼をこのまま放っておくのは危険です。それゆえ、神が彼の目を開いて下さるまでは、敵どもに対して何らかの術策を用いるのも悪いとは思いません。私どもはそう「神が王の目を開くよう」祈ることによって助力致します。他面で、貴公が慎慮をもって、誰か王と秘密裏に話せる信頼できる者を介して王の目を開くようになさるのが良いでしょう」。

少なくともこの文面上は、サヴォナローラはフランス王シャルル八世を敵視していなかった。見限ってもいなかった。彼は、フェッラーラ公が王を目覚めさせフィレンツェの側に、自分の側に益する立場に立つ姿勢をとらせてくれることを期待していた。

ただし、一国の君主に宛てたこの文書は、やはり純然たる私信とは言えないだろう。一定の限定付きの「私信」だったろうし、またこれが協定締結の一〇日後のものであることを考えれば、かつ、より純然たる私信で

しかも協定直後に書かれた何か別の文書が仮にあるとすればその中で、パレンティが伝えているように、サヴォナローラが実際に王を「愚かで取るに足らない人間だと書いていた」、こう王を唾棄してしまっていた可能性は否定できないかもしれない。

こうしたことを考慮したとしても、やはり、彼はなぜ公衆の面前での説教で、王に対して抱いた率直な感情と思考を吐露しなかったのかという疑問は消えない。ただしこれは、この時の情況から遠く離れた時と所にいる者の浅薄な疑問にすぎないかもしれない。というのも、この時サヴォナローラには、困難な事態が二重に生じていたからである。

まず市内で、三月一日から四月末までの「政庁」の執政長官に、メデイチ派のベルナルド・デル・ネーロが就任した。一月から二月の長官フランチェスコ・ヴァローリがサヴォナローラ派の実力者で中心人物だったのに対し、新長官デル・ネーロはメデイチ派の有力者だった。三年前、九四年のメデイチ支配体制からサヴォナローラ主導の共和制への政変の際には、彼自身も家族もサヴォナローラの厚意によって救われたということがあったと言われるが（参照、↓IX章）、サヴォナローラには強い敵対心を抱いていた<sup>16</sup>。この長官就任には、市内で、ことにサヴォナローラ支持派で、何か混乱が生ずるのではと不安が強まっていた。

実際、この後の「政庁」の下で、諸々の主要な行政委員会はアッラツピアーティなど反サヴォナローラ派に占められ、サヴォナローラに対する姿勢を変えていた。——しかし、「(全権)十人委員会」だけはそうではなかったという<sup>16</sup>。

加えて、ローマから教皇によるサヴォナローラ破門の脅威が迫ってきていた。ローマでは破門宣告の準備ができていて、破門は近い、と市内で広く一般に言われるようになっていた<sup>17</sup>。

この市内の様子を、フェッラーラ公の大使は公に、サヴォナローラが公に書簡を送ったと同じ三月七日付の書簡で、こう報告していた。――「市内はかつてなかったほど分裂しております。大混乱が生ずるのではないかと恐れられております。もしそうなれば大変、有害なことに、大変、危険なことになるでしょう。修道士はそうならないようにしようとしてはおります。しかし彼には、反対する者が、有りてに言いますと敵対する者が大変、多くおります。「フランス王の二月の」この愚かな休戦協定のこと知られてから特にそうです。修道士に敵対する者たちが頭をもたげ、非常に大胆になっておりますので、事態は悪化するでしょう」<sup>(18)</sup>

こうした状況の中でも、サヴォナローラは連日、反論と非難の説教を続けた。たとえば一日の説教では言っている。

……汝らの多くが破門〔状〕が来るだろうと言っている。汝らは昨年のことを覚えていないのか？ 汝ら宛に書かれた「そういう」ものを読むことになるだろう。昨年も同じことがあった。こういうものを準備しているのがどういう者たちか知らないのか？ 昨年は成功しなかった。たとえそういうものが来るとしても、それを作成する者は破門、とは別の悪事をねらっているのだと汝に言わなかったか？ 私はそれが早く来るよう神に願っている。――おお、「修道士よ」お前はこわくないのか？ 彼らが私を破門しようと思っていることなど、こわくはない。私は悪しきことはしていないからだ。……（傍点は引用者）

「昨年も同じこと」とは、一月に発した「トスコ・ローマナ修道会」設立の勅書のことだろう。そこでは、前章で述べたように、サヴォナローラの修道院長の座を奪い発言力を奪うことをねらいながら、それに異議を

唱える者は破門を含む罰に処すると宣言していた。しかし、その勅書は結局、何の効果も挙げられずに終わっていた。そこで今回、彼は、破門が近いと汝らは言っているが、また昨年と似たようなことになる、まず言おうとしたのだろう。

しかし、同時に彼は、彼らローマ教皇庁の悪しき者たちがねらっているのは「破門とは別の悪事」だとも言っている。ここで言う「悪事」とは、彼の処刑を意味するものだろう。

つまりここで彼は、自分の命が狙われているのだと示唆し、それに対する自分の覚悟を語っているのだ。彼の内心の危機感はこれだけ強くなっていたのだろう。

こういう事態になり、こういう心境に至っていたとしたら、フランス王シャルル八世のサヴォナローラに対する、同時にフィレンツェに対する、いうならば裏切りなどにこだわる余裕は、もうなくなっていただろう。目前の大敵、教皇に、教皇庁に向かわねばならなくなっていたからである。

実際、先に挙げたこの時期の説教、とりわけ二月末から三月初めにかけての説教では、教会の頹廢とローマの高位聖職者たちの墮落に対する非難がくり返されている。しかも非難の範囲を、キリスト教についての多種多様な知識のない者には理解できそうにない様々の教義を説き聞かせながら、彼の説くその教義にそむき続けている教会に、またその内部のあらゆる階層の聖職者たち、とりわけ高位聖職者たちに広げている。いや、教義を説き聞かせること自体が暗に彼らへの非難になっている。——こうした多様な非難は、当然、これまでどおり市内の反対派によって次々とローマに伝えられていただろう。

「政庁」とその周囲は、教皇庁の反撥を恐れ危機感を抱いていた。その中で、「全権」十人委員会」は新たに、自らの書記官でサヴォナローラ支持派のアレッサンドロ・ブラッチを特使として教皇庁に派遣した。教皇庁

との意志の疎通を、自分たちの正式の派遣員ではない教皇庁書記官ベッキに頼っていてはならないと考え、自分たちの意向と施策をこの特使から直接、教皇に正式かつ明確に伝えようとしたのだ。——（この対応は、この委員会だけは反サヴォナローラ派で占められていなかったからこそのものだった）。

一三日、ブラッチは教皇と会見した。ブラッチの、一五日付「十人委員会」宛報告書簡<sup>20</sup>によると、彼がこれまでのフィレンツェの方針、すなわちピーサの保持、フランス王との友好、反フランス神聖同盟への不加入、等を説明したのに対し、教皇は、「汝が言いたいのがそれだけなら、このまま帰るがよい」と、まず素っ気なく命じた。……汝の「政庁」が言っているのはいつも同じことだ。……「なぜこども頑固で強情なのか分からない」。……「自分が汝らの民に言うとしたら、……提示可能な真の正論でもって汝らの民のすべてを、自らの益に目を向けるよう説得し、導き、かつ彼らを、汝らが修道士によっておとし陥れられた盲目（「無知」と過ちから救い出すだろうと思う。だがこのことよりはるかに強く我々を悩ませ、我々が汝らのことを嘆く正当な理由を与えているのは、汝らの『政庁』の執政委員たちも市民たちも、修道士によって我々が苦しめられ、さげすまされ、脅かされ、踏みにじられているのを支持しているということだ。我々は、不相応ながら、この教皇座を占めているのに、だ」。〈傍点は報告書で教皇の言葉として記されているラテン語〉

ここには、教皇アレクサンデル六世の内心が、怒りが複雑に表出されている。その第一は、激しくなるばかりのサヴォナローラによる自分への非難に対する怒り、そしてそれを止めようとしなればかりか「支持している」——（と教皇は解釈している）——都市〔国家〕フィレンツェ全体へのいら立ちと怒りである。それを、自分は「苦しめられ、さげすまされ、脅かされ、踏みにじられている」と、正直と言えは実に正直に表出している。サヴォナローラの言葉は自分（たち）に対するまったくの罵詈雑言だと怒っているのである。

第二は、怒りの対象は彼個人に止まらず、その罵詈雑言を吐き続ける彼を「支持している」フィレンツェ全体におよぶものだという事である。これを感知しただろうフィレンツェでは、「政庁」は無論、有力者たちも市民も、当然、不安を覚えたことだろう。こうした不安は、反サヴォナローラ派の者たちにも、また、彼に破門状が来るらしいと他人事のように言い合っていただろう無関心層にも、生じていただろう。いずれの者たちも、程度の差はあれ、破門が都市〔国家〕全体におよぼす影響の大きさ（参照、↓XIII章）に思いをおよぼしていただろう。ここから、反サヴォナローラ感情を新たに抱いた者も、あるいは強めた者も生じたことだろう。

教皇の言葉に表出されている第三の、そしてある意味では最も重要なものは、彼の怒りがサヴォナローラの言説の、とりわけ教義解説の内容に、それが正統か異端かの問題に、まったく向いていないということである。教皇は怒りを、もっぱら、自分（たち）の有りようにサヴォナローラからくり返しあびせられてきた激しい非難に向けている。

こうした言辞は、すでに準備されていると言われていた破門状の内容のおおよそを予測させるのみならず、彼アレクサンデル六世の教皇としての適性の、いやそもそも聖職者としての適性の問題を提示していると言えるだろう。同時に反面でこれは、サヴォナローラの聖職者としての適性と正統性を示唆しているとも言えるだろう。しかしまた同時に、こういう教皇とこういう教皇を教皇として戴き続ける教会に、真剣に、真摯に向き合った、合わずにいらなかったサヴォナローラの悲哀を改めて感じさせる。

ブラッチのこの報告書の四日後の一九日、ベッキは「全権」十人委員会宛の書簡<sup>(2)</sup>で報告している。――  
サヴォナローラに反感を抱く複数の高位聖職者（すなわち枢機卿）が「彼への懲罰を進めるでしょう、彼を破

門に処するでしょう。それどころかこちらでは、先の〔修道院統合の〕勅書に服さなかったことを理由に彼が破門されると、公然と話されております」。

ローマ教皇庁では、破門もその理由も公然たる話になっているというのである。理由は、ここでも、教義上の問題ではなく不服従という罪だという。教皇らの現実の、そして周知の頹廢、墮落に対する激しい非難、弾劾を正式の理由に挙げることはさすがにできず、教皇の勅書への、しかもサヴォナローラの発言の場を奪うことをねらった勅書への不服従を挙げて彼を破門することにしてはいるのだという。教皇はもう、骨子の出来上がった破門状を発するチャンスをねらっていたのかもしれない。

ベッキのこの書簡が二日後の二二日に届くと、その内容が市内に伝わり、サヴォナローラ破門の噂が急速に広がった。こうしたことは、市内の反対派からローマの教皇にもその身邊の者たちにも、すぐ伝わっていたはずである。教皇庁内部では、すでに、フィレンツェの「政庁」とその周囲の諸機関がすでに反サヴォナローラ派で占められていると熟知されていただろう。したがって、まだサヴォナローラ側に立っている〔全権〕十人委員会の特使に示した教皇の意向が、市内の反サヴォナローラ派に勢いを与えてこの委員会の力も間もなく削がれるだろうことなどは、十分、予測できていただろう。のみならず、メデイチ派の中心人物である執政長官の下でのメデイチ家復活、メデイチ体制再興の可能性、すなわちサヴォナローラ失脚の可能性を、期待をこめて語り合ってもいただろう。

こうした動きの中、サヴォナローラは三月二七日まで説教を続けた。しかし、その後は、すぐ前でふれたように、五月三日まで沈黙した。四月中は沈黙していたのである。

この時期に、この情況の中で一カ月余も説教をしなかった。原因としては、これまで見てきたサヴォナロー

ラに直接、関わる面での情況の他、彼には直接は関わらないかのように見える面、すなわち少し前でふれた社会的、政治的面で的情況も改めて見ておかねばならない。

前年末からこの年に入って、この面でのフィレンツェの情況はかなり深刻化していた。

ピーサをめぐる戦闘が止まらない中、近郊農山村地域の荒廃が進み、農業など産業の衰退、地域間の交通路および地域とフィレンツェ市内間の交通路の崩壊が進んだ。食料不足でやせ衰え、憔悴した大量の者が各地域から浮浪者、乞食となって市内に流入していた。こうなる以前からすでに市内の食料不足が顕在化し、食料の異常な高騰が続き、餓死者が増えていたのに、加えて大量の浮浪者、乞食が加わり、餓死者はさらに増え、悲惨な光景がそちこちで目立つようになった。市の中心部を流れるアルノ川の兩岸には死体が散乱し、市街の狭い通路では無数の者が行き倒れになっていた。

当然のことだったろうが、食料をめぐる騒乱が続発し、公道ぞいの商店の破壊、略奪も続いた。サヴォナローラは、飢える者たちへの施与を訴え続け、実際に施与活動が続けていたという。市当局は食料の正当な価格での販売を始めたが、まさにその場で民衆の食料争奪競争、騒動が生じていた。<sup>20</sup>

これが、一五世紀末ルネサンス・フィレンツェの実状だった。しかもこの状況は、すぐ後でふれるが、深刻化する一方だった。

こんな中、追放されているメディチ家の統領ピエーロがもどって来るとの噂が流れた。騒動を起こしに来る、いや貧者を助けに来ると、噂の内容は異なっていた。一方は不安をあおり、他方は空望みを抱かせる悪質なものであった。しかし、これらに根拠がないわけではなかった。実際にピエーロはこの頃、なお抱き続けていたフィレンツェ復帰の野心を実現しようと、近郊スイエーナなどで動き始めていたからだ。三―四月の「政庁」が反

サヴォナローラ派で占められ、メディチ派の有力者が執政長官となったことなどが、彼に行動を起こさせていたのだろう。

四月に入ると、彼は軍勢を率いてフィレンツェの郊外に迫り、しだいに圧力を強めた。月末に近づくとうヴェネツィア軍指揮官の助力を得、一二〇〇名ほどの兵を率いて市の城門にまで迫った。教皇の支援を受けての、加えて自分の妻の実家でローマの有力貴族オルスィーニ家の支援も受けての行動だった。教皇のピエーロ支援は、言うまでもなく、メディチ家支配復活によるサヴォナローラの失脚、追放をねらったことだった。

ピエーロは、市内で二八日に五・六月の執政長官に選出されたピエーロ・デリ・アルベルティの「好意」も得ていたと言われる。この人物は、アツラツピアーティの指導者で、反サヴォナローラ意識がこれまでの長官デル・ネーロにも増して強かった。しかしアツラツピアーティは反メディチでもあったから、彼の「好意」がどの程度のものであったかは分からない。

ともあれ、ピエーロが何よりも期待していた市内での叛乱発生の兆しは見えず、メディチ復帰を求める叫びも上がらず、彼は撤退せざるを得なかった。<sup>(23)</sup>彼のメディチ体制再興の野心は消滅した。そしてこれを最後に彼の復帰の策動も終わった。市内のメディチ派は凋落した。そして代わって、アツラツピアーティの、つまり明白な反サヴォナローラの勢力が増大した。<sup>(24)</sup>

このような混乱の中で、サヴォナローラと彼の派にとって、政治情況は一層、厳しくなっていた。反対派が政治の中樞を支配していたのに加えて、市内に、教皇によるフィレンツェ全体の破門の不安が広まり、彼の説教を止めようとする動きが一層、強まっていたからである。

こうしたことが全体として、彼にこの月は一度も説教の機会を与えない原因となっていたのだろう。

三月二七日の後、彼がはじめて説教の機会を得た、しかも多くの難事を越えた上で得たのは、五月四日、カトリック信徒にとって大きな祝祭、この年のイエス昇天祭の日である。

この日にサヴォナローラに説教の機会を与えるかいなかは、彼の支持、反対両派にとってそれぞれ大きな意味をもっていたのだろう。そして両派それぞれが策動を続けていたのだろう。それを、「政庁」は放置しておけなかったのだろう。だが、アツラツピアーティなど反サヴォナローラ派が中枢を占める「政庁」もその行政機関も、内心は彼を沈黙させておきたかったにせよ、その意図を「政庁」として公式に表明することが市内にどんな反撥や騒動を惹き起こすか、不安でもあったようだ。

祝祭日の前日、三日になって、「政庁」は布告を發した。翌四日の祝祭日は別に、その翌日以降は何人にも公開説教を禁ずる、集会を介してペストが蔓延する恐れがあるなどの「正当な」理由によってだ、という趣旨のものであった。これには、教会に設けられた説教参加者のための補助の椅子、ベンチは祝祭日の翌日から撤去せよ、との一文が加わっていた。<sup>(25)</sup>

この布告によって、サヴォナローラには昇天祭の説教だけは許すがその後は禁止する「正当な」理由を示すことになる、「政庁」は考えた。つまり「政庁」自身が禁止正当とみなす限り他の者にと同様、彼にも説教は許さず、黙らせようとしたのである。また、このように問題をサヴォナローラに限らず一般化することで、市内の騒動を防ぐと同時に彼に説教を許していると非難してきた教皇への弁明もできると、計算していたのである。

なお布告で附加的に撤去を命じられた補助の椅子、ベンチが設置されていたのは、大聖堂だけだった。しか

もそれは、もっぱらサヴォナローラの説教の際に増える聴衆用だったという。<sup>26)</sup>

加えて、「政庁」は彼に、行政関係者ではなく市民を、第三者的使者をよそおわせて送り、自身の身の安全のために祝祭日の説教を控えるよう密かに説得していた。しかも彼の身近な支持者、知人たちも、反対派の動きの危険性を指摘して彼に説教を止めるよう熱心に勧めていた。こうした声に対して彼は、イエスが自分の教えをすべての者に伝えよと使徒たちに命じた記念の日であるこの祝祭日に、説教も与えずに人々を放り置くことはできないと、拒絶したという。<sup>27)</sup>

「政庁」は、サヴォナローラ派（「フラテスキ修道士派」）からの反撥も反サヴォナローラ派からの反撥も、さらには両派の衝突による市内の騒乱も回避しながら、とにかく彼を沈黙させようとしていたのだ。この動きを、アツラツピアーティなどは歓迎した。祝祭日には他の者は説教できるがサヴォナローラだけはできなくなる可能性を見てとったからだ。

「政庁」がこうまでしななければならない原因の根底には、容易には統制できない過激な集団が、反サヴォナローラ派に加わっていた事実があった。

それは、放蕩、享樂にふける旧貴族の若者たちの無法行動集団、大げさに言うなら軍団だった。コンパニヤッチ（「集団、軍団」と呼ばれていた。彼らにとって、サヴォナローラは最大の邪魔者だった。亡き者にしななければならない人物だった。自分たちの享樂主義的な生き方の最大、最強の非難者だったからだ。<sup>28)</sup>

「政庁」の苦心の動きにもかかわらず、彼に昇天祝祭日の説教も認めるなどという声が高まった。その中心にコンパニヤッチがいた。アツラツピアーティも加わっていた。無論それらの声に反対する声も上がった。フラテスキ（「修道士派」とも、ピアニョーニ（「泣き虫派」とも）言われる多様なサヴォナローラ支持の側から

だった。両派の騒動発生危険が強く感じられるようになった。市内は緊張した。

そんな中で、サヴォナローラは翌四日に説教するかどうかの賭けが、市内に広がっていた。「政庁」は、賭けを禁じ、翌日の説教妨害も禁ずる新たな布告を、急ぎ発した。この日、二つ目の布告だった。

しかし、こうした布告は何の効果もあげられない状況になっていた。すでにアツラッピアーティもコンパニヤッチも、説教阻止のために様々の実力行使に出ようと決めていたからだ。とりわけ後者はすでに、最終的には説教中に聖堂で騒動を起こし、その混乱の中でサヴォナローラの命をねらう、少なくとも重傷を負わせる策まで考えていると言われていた。<sup>30</sup> サヴォナローラの身近な者たちが彼に説教を控えるよう熱心に勧めていたのも、こうした話を耳にし、その信憑性を感じていたからだだった。

反対派はまず、説教壇を汚して、あるいは壇に火をつけて説教を阻止しようとした。前日深夜、説教壇に、死後数日を経たロバの死体を置いた。その悪臭と汚物で壇と周辺を汚そうとしたのだ。幼稚といえは幼稚な行為だった。早朝、これらは発見され、すべて除去され、浄められ、説教の用意は整った。……しかし、特にコンパニヤッチは、これだけで静まるような集団ではなかった。知られていたとおりの無法な過激集団だった。説教に押し寄せる多数の聴衆に衝撃を与え危害を加えて混乱を起こし、その混乱の中でサヴォナローラを亡き者にしようといふ者もいた。

正午少し前、サヴォナローラは信頼できる者たちに警護されてサン・マルコ修道院を出、大聖堂に着いた。そして三七日ぶりに説教壇に上がった。タイトルは「詩篇」第七篇の冒頭の言葉、「わが神エホバ、よわれ汝によりたのむ」である。<sup>31</sup> 少し長すぎることになるかもしれないが、この説教はこれまでの数多くの説教とはトーンの違いがあるので、あえて要点をたどってみよう。

まずこのタイトルは彼の言説の、というよりは全思考の基軸を成す言葉である。ここまで彼の生涯をたどってきて明らかなように、神を信じ、神を崇敬し、神に依り頼むということぬきに彼の思考はおよそ成り立っていない。この最も基本的でかつ核心的な言葉を、しかもすでに何度も何度もくり返し語ってきた言葉を、ようやく機会を得て行なう説教のタイトルとして採ったことに、この時の彼の置かれた状況と、その中で彼の格別の思いがこもっているように思える。

「信仰の力はいかに大きいことか」、と彼は語り出す。そしてこれについて延々と語る。「信仰の力」についても、改めてこうした直截的な言葉で提起し一般論として語らなくても、すでにこれまで実に多くの、そして実に様々の話の中で、その大きさを、またそれが人間の最大の、そして最後の支えであることを語ってきた。語り続けてきた。それなのにここで、一般論として静かに語り続ける。その上でまたタイトルの言葉、「……あなたに依り頼みます」、を語る。

そしてすぐ、「主よ、私は初めにあなたに語りましょう」と、まず神に語りかける。神に語った後は「正しき者たちに」、最後に「悪しき者たちに」語るという順で進んでいく。

神には、「初めにあなたに……」と言うとすぐ、「あなたには他の何〔を語る〕よりも先に感謝します」と言っ  
て本論を始める。感謝の理由として、神が自分に、「神の信仰を与え」、「神の存在と他の何にもまさる偉大さを確認させ」、さらには「超自然の光を与え、それによって私にあなたが神であり、父であり、子であり、聖霊である」と、かつあなたイエス・クリストは真の神であり、真の人間であり、肉体を持っていて我らの救済のために十字架に架けられた真の人間である」と、知らせてくれたことである。

こうしたあまりに基本的な、あるいは初歩的な、そして聴衆にとってはもうこれまで何度も聴いてきただろ

うことを長々と語ると、また先のタイトル、「……あなたに依り頼みます」、を語る。これまでの数多くの説教とは明らかに異なる話し方であり、話しの構成であり、内容である。

ここで自分の思考と信仰の全体像をその基本から、同時に核心から表明しておかなければ、聞かせておかなければ、という静かな決意がこめられているのではないか、という印象が自然に生じてくる。これを直接、聴いていた者たちは、今日の修道士はちよつと違うな、と感じていたのではないかと思えてくる。

神への語りかけは、次に自分に關する最も重要なことの確認に移る。言いかえるなら自分の正統化の基本と核心を語り始める。――自分を「惑わし者だ、民をあざむいている、と言う者たちがいます。しかし私をフィレンツェという都市〔国家〕に呼んだのはあなたです。……私は自分の意志でフィレンツェに來たのではなく、あなたからの靈感〔*ispirazione*〕によって來たのです。こう、自分の現状正統化の大前提をまず言う。

そして続ける。――「私がイタリアへの諸々の〔神〕罰について、教会の革新について、都市〔国家〕フィレンツェに与えた約束について、またあなた神の御名において予言した〔*predette*〕諸々の事について、私は自分の頭ではなくあなたの照し明かし〔*illuminazione*〕と命令〔*comandamento*〕によって予告した〔*prenunziare*〕のです。……同様に私は、フィレンツェの「政府」〔*統治* *governo*〕について、新たな「統治体制」〔*reggimento*〕について、私の正しい意志からでも間違つた意志からでもなく、ただあなたに服して説教したのです。あなたが私に言わせたことを言ったのです。サン・マルコ修道院でも他の集会でも同様にしてきたのです。都市〔国家〕の共通の善〔*益* *bene comune*〕に反する〔*と*〕はまったくしなかつたのです。私は常に都市〔国家〕の、また個々の者、皆の全体の善〔*益* *bene universale*〕を求めてきたのです。」

（こ）こでも、これまで何度も説いてきたことの基本と核心を、改めて展開している。彼は、そういう言説には

根拠がない、偽りだと反対派から非難され続けてきた。そしてそれに反論し続けてきた。彼の説教に集まっていた者たちは、このようなことをもう何度も耳にしてきた。サヴォナローラは無論そう承知の上で、あえて自分の信仰上の、また現実政治上の言説の基本と核心を、ていねいにくり返している。やはり、とにかくここで自分の言説の正統性を全面的に言い残しておかねばという、静かな決意が秘められているように感じられる。

その他に、自分個人にこれまであびせられてきた諸々の非難、中傷、すなわち、多額の金を隠し持っている、多量の金貨をサン・マルコ修道院の中に置いてある、修道院では君主然として支配している、市内に徒党を作っている、等々を挙げて、これらが真実でないことは聖母マリアが、そしてあなた神が証人だと言う。いや、もしこうした罪を自分が犯していたら、「自分をこう非難している者たちに捕らえられ、痛めつけられ、物質的益も霊的な益もすべて奪われるに値します。しかし神よ、彼らの言っていることが真実でないことはあなたをご存知です。もし真実なら、私はあなたからこうした罰を喜んで受けます」。

このような神への語りかけには、これまでも増して自分の防護の意図がこめられていると感じられる。とこのように神への語りかけには、神を自分の言動の最終かつ至高の保証人、防護者としながら非難者に、敵対者に反駁しているからである。神に絶対的に「服して」と言いながら、その神を至高の保証人、防護者として利用している。おそらくは無意識にそうしているのだろう。前にも見たように（参照、↓X章、前章）、信仰が深まるほどに、信仰対象は信仰者にそう機能してくれる存在になるのだろう。信仰上の至高の存在、絶対的な存在は、そうであればあるほど、信仰者にこう無意識のうちに利用される僕と化するのだろう。

次に語りかけるのは「正しき者たち」[「i buoni」]、すなわち「神に選ばれた者たち」[「gli eletti」]にである。この者たちを、「悪が増大するのを見てもうろたえるな」と戒め、……悪の増大のゆえに生ずる「大苦難の中

で、神に選ばれた者たちはより正しくなり、見捨てられた者たち〔「Hephraim」はますます悪くなるだろう〕と励ます。「遊びふけり、神のことを悪しざまに言い、不平不満を言い続け、人の悪口を言い、色欲への道を選ぶ者たち」がいる。これは「我々の敵たち」のことだ。「汝ら我が息子たちよ、祈りに専念するのだ。正しい生き方を続けるのだ。神は汝らを助けて下さるだろう。悪しき者たちはますます悪くなり、どんな企みも成しとげられないだろう」。

彼の唱える「正しい生き方」に従う「正しき者たち」なら、皆、当然、心得ているだろうことから語り始めている。彼らへの最後の教え、最後の励ましのような、どこか寂しさのこもった静かな言葉を続ける。以前、すなわち二年半前、新へ共和制へ設立の際にフィレンツェに対して、「私が汝に言ったことを行なえば、汝はかつてなかったほど豊かになり、強力になり、栄光に包まれるだろう」と、近い未来の輝かしい発展をくり返し訴えていた頃の数々の説教（参照、↓IX章、X章）に比べると、こめられている熱の差はあまりにも大きい。今や「正しき者たち」への説教は、もうこの者たちに語りかけることもできなくなると内心密かに思っている者の、惜別の辞のようにさえ感じられる。彼は、やはり、説教の機会どころか命を奪われることにまで思い至っていたのだろう。だからこそ、種々の障害も危険もあることを重々、知りながら、この日の説教を強行することにあくまで執着したのだろう。そう感じざるを得ない調子の説教である。言いかえるなら、彼は、イエス昇天の記念の日だからこそ、自分は近いうちにイエスの元に昇天していくことになる聴衆に感得させようとしていたのではないか……とも感じられる説教である。

最後に、「さあ、悪しき者たちに、キリストではなく悪魔を〔自分たちの〕主として欲している者たちに向かう時だ」と語り始めた。するとすぐ、聴衆の中から不満、異議の意を表わす大きな声が上がった。しかし

彼は続けた。――「主よ、はじめにお願いしますが、彼らをお怒りにならないで下さい。できましたら彼らを悔い改めさせて下さい。赦して下さい。彼らは盲目〔「無知」〕で、自分たちが何をしているのか分かっていないからです。そして彼らに言う。――「恩知らずの者たちよ、ちよつと私の言うことを聞くのだ。汝らは修道士〔「私」〕と戦っているのではなくキリストと、神であり正しく強い裁き人であるキリストと戦っているのだ。――自分はキリストの言葉を、意志をお前らに伝えているのだから、自分と戦うことはキリストと戦うことなのだ、と公言している。

こう言つて聞かせても無駄な相手であることを承知の上で言つていたのである。同様の言葉を続ける。――「私は、汝らに悪しきことあれと念じて汝らに敵対しているのではない。神の名誉と諸々の魂の救済に命を賭けるのが自分の務めなのだ。もし私が都市〔国家〕の靈的益と共通益を見捨てたら、大きすぎるほど大きな罪に陥るだろう。私には、私だけでなくすべてのキリスト信徒を助け、必要とあればキリストに自分の命を捧げる義務があるのだ。汝らも団結して共に平和をつくり出していくよう勧める」。

さらに止まらず、相手が言いたがっているだろう言葉を自分から言い出し自分で答えるいつもの論法で、語り続ける。汝らは私が「我々の戦いの元だと言うのか。そうなら答えよう。汝らの悪しき生き方が戦いの元なのだ」。そして言う、――「キリストは正しき者と悪しき者との間に平和をもたらすためではなく戦いをもたらすために来た。しかし正しき者たちの間には、まさに、平和をもたらさし彼らを一つの心、一つの魂にしようとして来た。正しく生きよ。そうすれば平和がもたらされるだろう。そうでなければ汝らが戦いの元となるだろう」。(傍点は引用者)

キリスト信徒なら、とりわけサヴォナローラの説教を多く聴いてきたほどの者たちならよく聞いてきたら



けられるのか、については、教会神学者たちの間で大論議が生ずるだろう」。

ここで彼は、「暴君」の説教禁止命令を語りながら、その「暴君」として、教皇の資格は無論、聖職者の一員となる資格もない頽廢、墮落ぶりを見せている教皇アレクサンデル六世を念頭において語っていた、あるいは、彼を示唆しようとして、少なくとも「正しき者たち」にはそう感得されるよう期待して、語っていたように感じられる。ああいう、まさに世俗の「暴君」そのもののような人間から説教禁止令が自分に発せられてきたのに、そして今もそれ以上の厳しい命令が発せられようとしているのに、教会神学者の間で論争も生じない教会全体の現状への憤りが、ここでの言葉の根底にあったように思える。

事実そうだったとしても、ここでそれを明言することは、教会組織に属する者として、また今後も属している者として、到底できない。「だが、今はこうした論議に入ることを避けるため汝ら〔Ⅱ〕「悪しき者たち」に言うが、私は紛争の懸念が生じた時は説教をしないだろう」と引き下がらざるを得ない。

だがまさにここで、ランドウッチによれば「修道士が説教して三分の二を語った時」、その「紛争」が目の前で生じた。彼は、「騒音が聞こえる」、「悪しき者たち」が静かにしていることに耐えられず騒ぎを起こしていると言い、彼らには「少し我慢せよ」と叫び、「汝らその他の者たちよ、恐れるな、神は我々の側にいるからだ、ここには無数の天使がいるからだ」と叫ぶ。しかしもうその叫びも効を奏さなかった。コンパニヤツチなどが企んでいたとおりの騒動、混乱が生じた。イエス昇天祝祭日に限ってようやく彼に赦された説教は、中斷せざるを得なくなった。

騒動は、何かをたたきつけるような音で始まった。集団が、備えられていた寄進入れの壺を投げ上げて床に落とす、大きな音を響かせたのだ。そしてその者たちが騒ぎだした。大多数の者は何が起こったのか分からず、

聖堂全体が騒然となった。煙と炎が生じ、怒声が響き、人々は驚き、あわてふためいて混乱し、恐怖の声を上げながらわれ先にと出口に殺到した。サヴォナローラは説教壇に座りこんだ。立って大きく声を上げてもいた。支持派フラテスキの多くが素早く説教壇をとり囲んで彼を守った。ランドウッチによれば、「説教壇の出口のところ、修道士を守るために剣を隠し持っていた何人かがその剣をぬいた」こともあって人々は動揺した。彼らフラテスキは、コンパニヤッチが聖堂の中で大混乱を起こし、それに乗じてサヴォナローラの命をねらおうとしていると早くから察知し、密かに防禦の態勢をとっていたのだ。これはコンパニヤッチには予測できていなかったようだ。彼らの究極の企みは失敗に終わった。

サヴォナローラは、武装した多数の支持者に嚴重に警護されながら、サン・マルコ修道院に帰った。夕食後、説教で少し語り残した部分を修道士たちに語ったという。院全体はこの夜、反対派の暴徒らの襲撃に備えて武装した者たちが警戒にあたったという。<sup>②</sup>

この説教を最後に、この九七年中の彼の説教記録は残されていない。少なくとも彼の現在の全集(E.N.)には収録されていない。全集の中でこの年の説教を収録する二つの巻は、二〇世紀サヴォナローラ研究の代表的存在で、この全集全体の企画・実現者であり、編集代表者でもあるR・リドルフイの編纂によるものなのだが、ここには五月四日の説教がこの年の最後の説教として収録されている。——まだ破門されたわけでもないのに、彼は説教の機会を得られなかったのだ。

五月四日の一件は、フィレンツェ中に色々の衝撃をもたらした。これまでサヴォナローラは、支持者の中では無論のこと反対者の中でも、その意味合いに違いはあれ、容易には侵し難い一種の権威だった。その彼が、

街頭でも路上でもなく、あろうことが大聖堂で攻撃され命をねらわれたのだ。一方では、こうしたことを敢行したコンパニヤッチなど反対派が、その勇断をもってはじめて権威に挑み、権威を一介の騒動当事者におとめたと評価され、支持層を広げた。他方では、神を恐れない暴徒たちの蛮行に怒りを覚える者が、あるいは強める者が増えた。フラテスキなど支持派は、相手の蛮行に対抗し素早くサヴォナローラを守りきった英断と勇気によって評価を高め、支持を広げた。両派の間の緊張が深まった。中でも反対派の言動は日ごとに熱くなっていた。<sup>(33)</sup>

サヴォナローラは八日、「神に選ばれたすべての者と誠実なキリスト信徒へ」と題する長文の公開書簡<sup>(34)</sup>を發表した。公開説教の機会を得られればそこで力説することを、書簡で語ろうとした、いや、せざるを得なかったのだと、書簡の公開という報に接した市内の者たちのほとんどが思っただろう。そして、彼は文書で、四日前の大聖堂における狼藉を説教でと同様、鋭く激しく非難しているのだろうとも思っただろう。

しかし「書簡」は、こうした予想とは異なり、敵よりも、彼が常に用いてきた言葉で言うなら、「我々」に向けられていた。

初めのところでまず、「我々が説教を断念した」理由を語る。――「我らの救い主に倣おうと思ったのでその意にかなうところで説教を断念したのだ」。「救い主〔キリスト〕」は、律法学者やパリサイ人の実に激しい怒りや憤激に幾度となく屈したのだ。

しかし「我々」は、「悪魔〔demonio〕が肉体には関心を持っておらず魂をねらっていることが分かったので、また汝らに神の言葉が伝えられない限り」、すなわち自分の説教で神の言葉が汝らに伝えられない限り「悪魔は人々をあざむき続けることが分かったので、また汝らがだまされていくのではと不安なので、また汝らが救

われることを強く願うので、今は口頭では行なえないことを文書で行なうことにする」。むしろこの方が、説教を聞けない者も文書は見るので、「より広く全体に」神の言葉を伝えられると思う。

こう、公開文書を発する理由を述べている。しかし、当の説教はいつ、どこで行なった説教なのかの説明はない。「悪魔」とは誰のことなのかの指摘もない。つまり、論難しようとする対象については、時、所、相手など一切、語っていない。周知のことで説明の必要もないと考えたとも言えるだろう。しかし彼は、この文書に何らかの非難、反論、攻撃が加えられれば、自分は特定の者についても事柄についても書いていない、一般論を書いたのだと、これまで以上に弁明できるようにしていたのではないか。反対派の勢力の強まりやその動きを、またそれらについて常時、伝えられているローマ教皇庁の動向を考えれば、こうした防禦の姿勢は、ここでこそ不可欠だと彼は認識していたはずである。

次に彼は支持者たち、信奉者たちを鼓舞するとともに彼らに命令し始める。自分が受けている「諸々の苦難と迫害に不安を抱かないでほしい。むしろ祝ってほしい。というのも主は我々を、我々が主を愛し真理を愛するがゆえに苦難を受けるに値するように下さったからだ」。——苦難も、主に選ばれた我々への主の恵みだというのだろうか。……「汝らは我々が説いてきたことは真理だと確信しなければならぬ。我々が予言してきたことすべてが徐々に実現されるのを見てきたからだ。また、約束された「||自分が汝らに約束してきた」神の恩寵と慰めももたらされると信じなければならぬ」。

こう命ずるだけでなく命ずる根拠を、遠く歴史をさかのぼって示そうとする。過去、教会は世界中で常に迫害の下で成長してきた。迫害が少なくなると教会は、「その数も勝利することも」少なくなった。「今、神は教会を革新し成長させようと欲しておられるのだから、迫害が再び始まって驚くにはあたらぬ。この迫害の

下で教会はあらゆる面で完全なものとなるのだ」。

当然これと同じことが自分たちについても言えるのだとばかりに、具体例を挙げながら言い続ける。「我々すべてをすぐ大きな迫害の下に送ったことはなく、迫害を通して我々を少しづつ育んで下さってきた」。すなわち神は、初めは自分が「嫌った、あるいは罰せねばとみなした者たち」〔*nomini reprobi*〕を見捨てた者たち」に「赦し」〔*permissione*〕を与えて彼らが「我々を笑いものにする」ことを認め、次いで「我々に多くの中傷を、すなわちペテン師、偽善者、異端者、など多くの中傷」をあびせるのを認めた。

ところが、言いかえればこのように神に見捨てられた者たちは、そうした中傷に値することを「我々の中に見つけられなかったので、多くの歪んだ方法で、我々が訳もなく破門に、あるいは聖務禁止に処されるようにしよう」と試みた。しかし彼らはこれすら成しとげられず、「我々の」一員〔*persona*〕に対して多くの陰謀を企んで我々を脅した。そして次に、彼らはその者を殺そうとして正体を現わした。にもかかわらず、我々は一滴の血も流さなかった。なぜなら、我らの主は我々の弱さを知っておられて、我々が「自分たちの」力を超えたところで試されるのを認めにならないからだ。(傍点は引用者)——ここで言う「一員」とは、聴衆の誰もが分かっただろうが、私、すなわちサヴォナローラである。

この直前までは、これまでのふだんの論法どおり「我々」を前面に出し、聴衆に自分との一体感を抱かせて書いてきたのだから、ここで初めて、——「私」とか「自分」とかの直接的な表現を用いずに——自分を前面に出して書いている。四日前の件は、神に見捨てられた者たちによる「私」の殺害の試みだったのだと公言している。

しかしすぐ、この「迫害」は神が「我々」を成長させるために与えてくれたものだ、いつものように聴衆

を自分と一体化して語る。神はこの「迫害」が「我々の力を超えた」ものにならないよう配慮してくれているのだ、我々が悪しき者たちの狂暴を「一滴の血も流さずに」抑えたのは神の意志だった、というのである。

つまり、「我々」は「神に選ばれた者」であり、そうだからこそ神による試練として「苦難」を、「迫害」を受け、受けながらも神の恵みを得ているのだと、聴衆の心を捉えていく。しかも加えて、「我々の苦難は少しずつ大きくなるので、我らの主は我々がより大きな苦難に耐えられるよう、我々の信仰、徳、勇気を成長させて下さる。こうして我々を一層大きな迫害に備えさせて下さる」、と聴衆を励ましながら巧みに歛心を買う。

では、「我々」とは反対に神に見捨てられた者たちはどうなるのか。——「神は自身が選んだ者たちに非常に多くの苦難を与えるのであれば、見捨てた者たちにはどれほどの苦難を与えるのか」、とみずから問を發して言う。——前者についての「裁き〔= iudicio〕は、慈悲をもって〔その〕罪を贖あがなって下さるものになる」が、後者についての「裁きは慈悲の無いものになる」。

あまりに当然の答えであって、これで納得するほど聴衆も単純だとは、当然、思わなかったのだろう。答えを続ける。——「神が悪しき者たちに非常に多くの悪と不敬を赦している、当面は罰することも、その悪行への復讐を示すこともまったくなく赦していることに驚くな。なぜなら、神が悪しき者たちに発する怒りの中で、彼らの罪を繁茂させ、彼らを悪魔の手先にし、かつ正しき者たちの徳を鍛えることほど大きなものはないからだ」……「彼らへの裁きはきわめて厳しくかつ永遠のものになるだろう。反対に我々は、天国における〔神の〕大きな遺産を待つことになる。それを得られないことは我々にはないだろう。この世で我々は、神がすべての子に行なったと同様の懲らしめや罰を受けて神の子となるからだ」。

何と巧みな論理かと思わせられる。——神が悪しき者たちにその欲するままに悪しき言動を赦しておくの

は、この者たちを「悪魔の家」すなわち地獄に落とし、悪魔の手先にするためであり、自分サヴォナローラを介して得る神の厳しい怒りや教えに従って生きることだ。「神の子」となる汝らは、天国に招かれて神の「大きな遺産」を確実に得られる、というのである。

サヴォナローラの教えを受けて「正しい生き方」を続けようとしていた者たちは、自分たちを中傷し非難して奔放な生き方を続ける者たちが勢力を増し、敵対行動を広めかつ強めている状況の中で、彼の説教に押し寄せていたのだ。彼らの疑問と不安に応え、かつ彼らを励ますには最適の論理、かつ不可欠な論理だったのではなからうか。

励ましはさらに続く。――「確かに、過去の殉教者や聖人たちは、これまで我々が受けたことのない非常に大きな迫害と災いに遭ってきた。それゆえ、我々は嘆いたり悲しんだりしてはならないし、我々は神に捨てられたと信じてもならない。それどころか、我々は、神を讃えているがゆえに迫害をこうむっているすべての者のために天国に用意されている、永遠の榮譽にふさわしい者として選ばれた「神の」子なのだ、と信じなければならぬ」。

自分たちには天国の榮譽が、敵どもには地獄の罰が、と単純明快に区別して語るこの文書も、しだいに追いつめられてきている者の叫びとしては、稀なものではないだろう。ただしこれは、敵に、またそれより先に「我々」に向けられているようでありながら、そして実際にそうでありながら、それよりも先にまず「私」サヴォナローラ自身に向けられていたのではないか。力を増す敵にそうさせているのは、敵を「最後には」地獄に送ろうとする神の意志であり、自分に厳しい試練を与えているのは、自分を天国の榮譽によりふさわしい者にしようとする神の意志なのだ、彼は自分に教え、自分を励ましていたのではないか、と思える。

以前は、神に「照らし明かされて」、神の「超自然の光を受けて」、神に「靈感を与えられて」見た、知った、「全能の神に代わって」言う、等々、いうならば明るい近未来志向的な自己幻想に基づいて公言していた。だが、ここではもうこうした自己幻想で自身を支え難くなり、自分が今、受けている「迫害」は、神が自分に天国において榮譽を与えるために与えているのだと、いうならば自分の終末を見ずえた自己幻想で自分を支えずにいらなくなっていたのではないか、自分をこう鼓舞せざるにいられないほど追いつめられていたのではないか、とも思える。そしてここでもやはり、当然のことだろうが、こめられている熱の劣えを感じざるを得ない。

こうした意味でこの公開書簡は、説教という自分の最大の武器を奪われた彼が、表題どおり「神に選ばれたすべての者と誠実なキリスト信徒」に向けて発信したものではあるけれども、その対象の核心に密かに存在していたのは、彼自身だったように思われる。

ところでこの書簡は、ランドウッチにはこう受け取られていた。「書簡は人々に、信仰を固く守るよう訴え、<sup>よ</sup>邪なアツラッピアーティの者たちはあのような悪辣なことを行ない神の聖堂を汚したことによって自身に有罪判決を下したのだ、と教えていた」<sup>(5)</sup>。

しかしランドウッチは、この説諭が、肝腎の相手アツラッピアーティにどう受けとられたのか、受けとられると彼自身は思ったのか、などについては、何も書き残していない。おそらくは彼のみならず大多数の者は、相手がこれに心を動かされるとはまったく思っていなかっただろう。のみならず、多くの者の関心はこの時、この書簡にはあまり向いていなかったのかもしれない。

というのも、サヴォナローラ信奉者ランドウッチすらこの後は、『日誌』でこの件にふれることはしていない

いからである。代わって主に食料品、ことに主食の小麦の価格の高騰とそれをめぐる騒動、混乱、および悪疫——おそらくはペストやコレラといった疫病——による連日の大量の死者に関心を集中しているからである。すぐ前で見えた食料の不足、異常な高騰、餓死者の増加は変わらず続いていたのに加えて、悪疫の被害も増大していた中で、彼は小麦の価格を具体的に、詳細に記述し続け、悪疫についても死者の多さと市民の混乱、および市内の空洞化を、五百年余り後の現代の読者さえうんざりするほど書き続けているのである。

念のため、悪疫関連の記述の主なものだけを見ておこう。どんなテーマについてであれこの時代、この時期のイタリアを、ことにフィレンツェを考える、あるいは語る際、この光景を忘れ、あるいは省略しては、実態に、とりわけその核心に迫ることは不可能ではないかと思われるからである。

一四九七年五月一八日、このところ熱病〔「Febbre」〕で人が大勢、市中でも病院でも死んでいた。この熱病は……〔発病すると〕二、三日で死んだ。サンタ・マリア・ヌオーヴァ病院〔「市内で最大の病院」〕では一日に一二人、死んでいた。

一四九七年六月一日、〔このところ〕人が大勢、熱病で、〔発病してから〕あまり日が経たないうちに、ある者は八日で、ある者は十日で、ある者は、市民だったが四日で死んでいた。……〔満月後〕月が欠けていく間に病院と市中を合わせて二二〇人の患者が出たと言われていた。また病院では疫病〔「morbo」〕コレラないしペストの患者も出ているとも言われていた。一日あたり一〇人か一二人が入院していた。そして今日はサンタ・マリア・ヌオーヴァ病院で二四人が疫病で死んだ。……

六月一三日、一日で病院と市中を合わせて百人ぐらい死んだ。満月の日だ。

同月二八日、一日で六〇人が、やはり熱病で死んだと言われていた。

六月までの状況を、ランドウッチ同様この時のフィレンツェに生きたパレンティは述べている。——「熱病で多数の者が、老いも若きも、男も女も、「かかつてから」何日もしないうちに、何の治療も無いまま死んでいった」<sup>(36)</sup>。——まさに核心を捉えた記述かと思える。

またランドウッチの記述にもどると、――

七月二日、熱病と疫病で多くの人が死んでいて、サンタ・マリア・ヌオーヴァ〔病院〕では一日に二五人も死んだ日があった。

同月三日、疫病の家が何軒も見つかった。誰もが〔市外に〕逃げ出そうかと考えるほどだった。

一四九七年七月九日、サン・マルコ〔修道院〕で疫病が見つかった。そして修道士たちが大勢、院を出て田舎の父親や親戚や友だちの家に行った。しかし〔院長〕ジローラモ修道士は何人かの修道士とサン・マルコ〔修道院〕に残った。このところ疫病の家が三四軒ほどあったし、熱病の家も同じくらいあった。

サヴォナローラは、以前からペストを、「正しい生き方」にそむいて生きる者たちへの三大神罰の筆頭に挙げてきた（参照、↓XI、XIII、前章）。しかしペストの蔓延で状況が深刻化すると、ペストについては沈黙し、神罰にも挙げなくなっていた（参照、↓前章）。だがこの年に入ると、少し前で見たとように、その三大神罰が邪悪な敵たちに下るよう祈れと説いていた。それなのに、今やペストないし類似の悪疫は自分の院をも襲い、

修道士たちのほとんどがその猛威を避けるべく院を去らざるを得なくなっていた。自身が長を務める修道院すらこのようにペストに抗しようもなくなつた中で、彼はこの事態についてどう考えていたのか、何かを語つたのか、沈黙したままだつたのかは、不明である。

おそらく、ここでも沈黙し続けたのだろう。何も言えなかつたのだろう。彼はやはり、信仰を超えた現実が生ずると、思考が停止し沈黙する他なかつたのだろう。(参照、↓前章)——ここでもサヴォナローラは、ある観念を、それがどんなものであれ思いこむ、信じこむ、信仰することが人間の思考活動におよぼす影響の大きさ、深さを、どうしようもなく見せてくれているように思える。

一方、ランドウッチは言っている。

同月一六日、フィレンツェに疫病の家が三〇軒ぐらいあつた。熱病でも大勢死んでいた。注目すべきことに、死んだのはすべて二〇歳から上は五〇歳までの家長たちだつた。子供たちではなかつた。教会と世の中の革新について修道士が言つたことが事実だと証明されたように思えた。(傍点は引用者)

信徒とは、とりわけ心からの信奉者とは何と有りがたいことよ。——こう、サヴォナローラは感謝すべきなのでは、とも思わせられる。ランドウッチは、市内の、周辺の惨状を日々、見つめながらなお、「教会と世の中」が神の意志にそむいているから、「革新」されるべきなのにされなからペストという神罰が現実の下されてきていると、サヴォナローラが以前、説いていた、そして今や説かなくなつたことをそのまま信じ続けている。信仰とは、やはり、こういうものなのだろう。こういう信徒が、信奉者が大勢いたのだろう。信仰が、一度、

内面世界の核となると、——サヴォナローラほど固くではないにせよそうなる——、そこから解放され自由になることは、人間にとって不可能と言わねばならないほど困難なのかもしれない。

だがランドウッチは幸い、目の前に生じた事態を無視することも、見て見ぬかのようにすることもなく、しかと見さえ、記述することができた。そしてこのように貴重な歴史記録を、ルネサンス・フィレンツェを知る上で不可欠な記録を残した。

一四九七年七月二〇日、貧乏人が大勢、疲れはてて路上で倒れたまま死にかけていて、市内のそちこちで一日中、担当の者に集められ、「車輪つきの」担架に乗せられ、病院に運ばれていき、そこで死んでいた。

一四九七年七月二九日、太陽が暗くなり、パスト（「*paste*」）と熱病（「*febre*」）で人が死んでいった。そのため市は市民がいなくなって空っぽになっていた。田舎に行ける者は行ってしまったのだ。<sup>37</sup>

「太陽が暗くなり」というのは日食だったということなのかもしれない。そうだとすれば、人々の不安は一段と深まったことだろう。

こういう状況の中で、サヴォナローラは自分におよんできた「迫害」に対応しなければならなくなっていた。サヴォナローラの書簡公開の数日後、教皇アレクサンデル六世は、五月一二日付と翌一三日付のサヴォナローラ破門勅書を、初日付のものはフィレンツェ「政庁」に向けて、翌日付のものは——（前日のものの書写だというが）——フィレンツェ市内の複数の教会と修道院に向けて発したという。

しかし、初日付のものは、「政庁」に届くことはついになかった。翌日付のものは、一カ月余り後の六月一八日、ようやく市内の五つの教会、それもサヴォナローラに強く敵対してきた教会にのみ届いた。

こういう信じがたい遅延が生じたのは、教皇庁が、あるいは教皇がこの勅書の持参人として選んだ人物、ジョヴァンヴィットーリオ・ダ・カメリーノが、フィレンツェ「政庁」に出頭することを、いやそもそもフィレンツェ市内に入ることを恐れていたからだった。というのも、彼は神学者で、以前、市内であまりに強硬に反サヴォナローラの声を上げ続けたため「政庁」から市外追放に処されていた。それゆえ、市内に入れば、とりわけ「政庁」に向かったりすれば到着前に捕らえられ投獄されるだろうと恐れ、どこかで、(おそらくは近郊スイエーナで)身を隠していた。そのため、教皇庁も彼の行方をつかめないでいたという。こういうことがどこまで真実なのかは不明である。そもそもなぜこういう人物を破門勅書の持参人に選んだのかも、不明のままのようだ。

六月一六日、スイエーナから、「政庁」に宛てたこの人物の書簡が届いた。教皇から預かっている「政庁」宛の幾つかの物を届けるため、自分の身の安全保障を求めるというものだった。預かり物が破門勅書であることは、もう誰もが分かっていた。反サヴォナローラ派が占めていたこの時の「政庁」には、破門勅書は歓迎すべきものだっただろうが、市外追放に処されている罪人の身の安全保障を保障することはできなかった。ましてや、サヴォナローラはなお市内で権威を有しており、彼への敵対を理由に追放に処されている人物の身の安全保障は、反サヴォナローラ派の「政庁」にもまだできなかったのだ。

しかし、どういう経緯をたどったのか、どういう手だてを用いたのかは不明ながら、二日後、勅書發送からは一カ月あまり後の六月一八日、すぐ前でふれたように「政庁」には届かず、なぜかサヴォナローラに強く敵

対してきた五つの教会にだけ、届いたのである。<sup>(38)</sup>すべて教皇（庁）の側に何らかの底意が、策があったからだろうと推測はされる。しかしこの勅書持参の件については不明点、疑問点が多い。その一部はこのすぐ後で明らかになるけれども、他の諸点については、これこそなぜかは分からないが、近・現代の研究者たちの間でも論じられていないようだ。

破門勅書の内容のおおよそは、先に見たように市内ではすでに三月から知られていた。そして関係者たちはそれぞれの対策を考えていた。サヴォナローラは、勅書が発送されてから七日後の五月二〇日、教皇に書簡<sup>(39)</sup>を送っていた。まだフィレンツェには届いていない、したがって当然まだ読んでいない破門勅書への反論の意図を秘めて書いたのだろう。

彼はまず、「教皇聖下、その御足に口づけした上で」と語りかけている。そして本文の冒頭では教皇を「我が主」「dominus meus」と呼び、最初の段落では、「聖下は地上では神の代理（「vice Dei」）の役をはたしておられる」とも語っている。そして自分をその「僕」（「servo」）とも称している。すべてキリスト教世界では当然のことなのかもしれない。しかし彼がこれまで教皇に送った文書には見られなかった慇懃な呼びかけであり、表現である。

しかしこうした表現で始めながら、本文に入るとこれまでも増して率直に述べている。

我が主はなぜご自身の僕に怒っておられるのですか？ 私が何をしたのですか？

さもなければ我が手にどんな悪（の記し）があるのですか？ 「聖下の」<sup>おし</sup> 邪な息子たち（「iniquitatis」）が私を不当にも中傷しているのではないかと、彼らをご信じになる前になぜご自身の僕であ

る私にお尋ねに、お聞きになられなかったのですか？

「主」への、単なる質問というより挑戦的糾問である。これまで教皇に送ったどの文書にも、いや他の俗界の君主や王たちに送った文書にも見られなかった調子の書き出しである。しかもすぐ自説をくり広げる。

聖下は地上では神の代理の役をはたしておられますので、彼らは聖下に私が「聖下への」不敬の罪を犯しているとは告発しているのです。私が悪意をもって「聖下を」侮辱し攻撃することを決してやめようとなないと、ありもしないことを捏造して告発しているのです。彼らは私の言葉を幾重にもねじ曲げ、神をも恐れず歪めているのです。

二年以上こういうことをくり返しているのです。しかし、……

「しかし」、の後は、自分に帰せられている「罪は無実だ」という主張ばかりである。

自分の説教を聴いた何千人もが無実を証言するだろうし、自分の口から出た本当の言葉は記録され、正確に報告され、かつその大部分は書店や印刷所の努力によって至る所で利用可能だ。そう「信じております」。だから、とは言わずに続ける。――「これらを手ななさり、お読み下さり、その中に、彼らが不正にもしばしば聖下に告発してきたような聖下を攻撃することが何か〔私の説教の中に〕あるのかどうかをご検証下さい」。……私が公然と話しあるいは書いたことに何か問題があればそれについて「私にお尋ね下さい」。でき得る限り明瞭に答えて彼らによる非難を一掃できればと「望んでおります」。

懇請しているようでありながら、自分の説教の印刷されたものを読め、分からないというなら自分に尋ねる、すべて解説して疑問を解消してやる、と昂然と言いつ放っている感がある。

これでもたらないとばかりに言う。——「聖下がどうして彼らのよこしま邪さと愚かさを見抜かれないのかと驚いております。——汝はどうしてそれも愚かなのか、自分に聞けば教えてやるのに、と言わんばかりである。

しかし終わり近くなると言う。——自分は近々、一著『キリストの勝利について』を刊行するが、そこから、「私が（とんでもないことですが）異端の説の流布者か、カトリックの真理の流布者かが明白になるでしょう。それゆえ、彼らをねたみ深く汚れている者たちを信用しようと思ったりなさらないで下さい。彼らが多くの嘘を重ねてきていることはすでに明らかにされているからです。——自分の持論を述べた書に、あの教皇が関心を抱くことなど期待できるはずもないと、彼は重々、思っていたはずである。いたにもかかわらずこう書かずにいられなかったのだろうか……」。

これに続いて結論のように言う。——「もし人間の助けがないなら、そして不信心な者の悪行がはびこるなら、私は神に、我が救い主（「キリスト」）に依り頼みます」。そして彼らの不正を世界中に知らしめ、彼らがいつか自分たちの行動を悔いるようにします。

この宣言に教皇への形式上の忠誠の言葉を附してこの書簡は終わる。一体、これで何を言おうとしていたのか？ 何のための書簡だったのか？

この書簡で最も注目されるのは、教皇に対する姿勢である。初めのところでは、教皇を地上における神の代理人の座に在ると、——内心ではその資格はまったくないと信じていたにせよ——書いていた。そして糾問や非難を続けながらも自分が無実であることを主張し、その理由を自分に尋ねてくれれば教えてやると言わんば

かりだった。ここまででは、絶望しながらも一縷の望みでもあればとの思いが残っていたのかもしれない。

しかし末尾では、自分への「人間の助けがないなら、……私は神に、わが救い主に依り頼む」と、わざわざ言っている。これは、お前はやはり所詮は人間だから、——しかも「悪しき者」の「首領」的な存在だから、と内心では思っていただろうが——、自分を助けるなどしないかもしれないが、それなら自分は「わが救い主に依り頼む」と言っていることになる。これでは、書簡には破門処分への抗議の意図は強く残るけれども、処分撤回申請ないし請求という意図は、無いにひとしくなる。書簡は相手の反撥を招く元になる。

やはり、世に知られた「悪しき者」の代表的教皇に、なぜわざわざこういう書簡を書いたのか、送ったのかという疑問は残る。

自分のような、真に「神に、我が救い主に」選ばれ、聖別された「正しき者」が、あのような真に「よこしま邪な者」に真実を言っておかずにいられるか、といった思いに突き動かされたのか？ あるいは、教皇などは別にして、自分の信奉者たちを、説教によって動かすことが不可能になった信奉者たちを、こうした書簡で動かさうとしたのか？ だからあえてこれを公開したのか？ あるいはこの二つの思いが共に働いていたのか？

いずれにせよ、この書簡も、かなり追いつめられてきた彼の心境を表出しているものの一つであることは、間違いないだろう。

ところが、教皇はこの書簡が気に入りに、破門勅書を発したことを悔いている、サヴォナローラへの態度を変えようとしているという話が、親サヴォナローラの枢機卿からフィレンツェの大使に伝えられ、フィレンツェに密かな情報として報告されたようだ。この情報の真偽の程は、また真実だったとしてその原因は何かについては、現代の研究者の解釈が提示されているだけである。その解釈の趣旨は、これまで本稿で述べてきたこと

の範囲（参照、↓XII章）と重なる。すなわち、この世の様々の利益、地位、享楽に目のない男である教皇は、自分を激しく非難する者であれ、その非難が自分の地位、冠を失なう恐れにつながらない限り、「一定の寛大、忍耐、無関心」を示していく。加えて教皇は、サヴォナローラ書簡の最初の指摘、すなわち彼の敵対派が自分に流す情報の真偽の程はすでに知っていた。しかし、それゆえに彼らを強く攻撃して反撥を誘い、自分の地位、利益を害するようなことは、この教皇はしないのだ。<sup>(40)</sup>

まさにこのとおりだったかもしれない。しかしだからといって、教皇がサヴォナローラへの対応を変える、破門勅書を改めるといった期待はあまりに過剰だろう。そうした変身が自分の教皇冠すなわち地位と日々の淫蕩享楽生活にどう影響するかを、彼は誰にも増して計算していたはずだからである。

実際、破門勅書には何の変更も生じなかった。そして六月一八日、破門勅書がフィレンツェの、強い反サヴォナローラ派の五つの教会に届いた。受け取った五つの教会は、鐘を鳴らし、それに合わせて司祭が勅書を読み上げ、かつ貼り出し、大々的に公表した。<sup>(41)</sup> 加えて反サヴォナローラ派の者たちは、この勅書を俗語（「トスカーナ語」）に翻訳し印刷に附した。市内で広く注目され、すべての者に知られるようにしたのだ。<sup>(42)</sup>

あえてくり返すけれども、これが届けられた五つの教会の中に、サヴォナローラが院長であるサン・マルコ修道院は含まれていなかった。つまり、サヴォナローラ破門勅書はサヴォナローラには届けられなかった。——なぜなのか？ そもそも破門は当の人物に直接、通知されることなく一般に公表されるものなのか？

勅書で教皇はまず言う。——「我々は、深い信仰と学識を有する聖俗両世界の貴顕の士たちから何度も聞いたのだが、修道士ジローラモ・サヴォナローラと称し、通称の限りではフィレンツェのサン・マルコの長であるらしい者が」、フィレンツェ「国内で有害な教義を広め」て、「キリストの尊い血で贖あがなわれた素朴な心を持つ

た者たち」の間に混乱、分裂、争いをもたらしているというところで、「心から残念に思う」。

そこで、我々は「神への服従〔の義務〕に基づいて」、彼に、説教を中止し我々の所に来てその過ちについて釈明するよう「勅書という形の書簡で命じた」。しかし彼はそれに従おうとせず、若干の弁明書なるものを提出した。「我々は十分に考慮し、かつさらなる慈愛をもって……提示された彼の弁明を受け容れた」……「我々の寛容が彼を正しい服従の道へと回心させるはずだと願ったからだ」。

ここまでは、九五年夏から秋にかけての三度の勅書とサヴォナローラの二度の弁明書のことを語っている。注目すべきことに、彼の二年前の弁明を教皇は「受け容れた」と自分で言っている。サヴォナローラは弁明書の少し後にそう言っていたのだが（参照、↓Ⅻ章）、その信憑性を証明するものがなかった。それをここで教皇自身が証言している。

「だが彼は」、――と教皇は続けて述べている――その「強情」を貫こうとばかりした。「それゆえ我々は〔前年〕一月七日付の勅書という形で、違反者は破門に処すとした上で、サン・マルコ修道院は我々が新たに設けたトスコ・ロマーナに統合されるよう命じた」。

前年の勅書は、前章で見たとおり、何の成果も挙げられずに終わったのだが、その責任は決してサヴォナローラとサン・マルコ修道院にだけ帰せられるものではなかった。しかし教皇はこの破門勅書では、サヴォナローラが変わらぬ「強情」ぶりを発揮してこの命令に従わなかったことを、次のように明確に破門の理由として挙げている。

「それゆえ我々は、今、汝らと汝らの〔下の〕全員に、祝祭日、汝らの教会に多数の民衆が出席しているところで、……上記の修道士は破門されたと宣言し明示するよう命ずる。これに従わない者は破門に処する」。彼

の処分理由は、「教皇の勧告と命令に服従しなかったことだと記憶せよ」。

こう命じた上で最後に、「破門に処されかつ異端を疑われる」〔= excommunicatum et heresi suspectum〕上記の修道士ジローラモ」を助けること、あるいは彼と交流すること、あるいは彼を讃えることを禁止し、かつ、この命に従わない者は「彼と」同様に「破門に処する」とまで附記している。どんな形であれサヴォナローラと交わる者はことごとく彼と同様に処罰するという、厳しい宣告である。(傍点は引用者)

しかし、より注目すべきなのは、ここで教皇が、(傍点を附した部分で)彼の「異端を疑」っていることと明記していることである。これはつまり、「異端」と判定すること、「異端」として罰することはできていない、と明記していることである。

のみならずここでは、サヴォナローラが多くの説教で、あくまで暗にはあるが、とりわけ教皇およびその家族、一族の、加えて枢機卿など高位聖職者たちの頹廢しきった日常の有りようを、厳しく、激しく非難、糾弾し続けてきた点にまつたふれていない。教皇にとっては彼を沈黙させねばならない最大の理由に、まつたふれることができていない。つまり、この点を破門の理由として挙げるのが、表向きはついにできなかつたのである。

なおこの勅書の名宛人にも注目せねばならない。それは、「愛する息子たちよ」〔= Dilecti Filii〕である。

二年前の三通の勅書では、ローマ教皇庁への出頭命令と説教の全面禁止命令の二通が、「愛する息子よ」〔= Dilecte Fili〕と明らかにサヴォナローラに宛てられている。他の一通は、内容が彼以外の者にも関係しないわけではないものであるためなのかもしれないが、「愛する息子たちよ」〔= Dilecti Filii〕と、複数の者に宛てられている。送り先も、彼ではなく、彼に最も強く敵対するサンタ・クロッチェ教会である。すでにここで

も、中心的当事者ではなく、その最強の敵に宛てられ、送られている。

だが今回の勅書は、出頭命令や説教禁止令よりはるかに重大な破門状である。それが、「息子たち」に宛てられている。サヴォナローラに宛てられていない。当事者、被破門者である彼は、「修道士ジローラモ・サヴォナローラと称し、通称の限りではフイレンツェのサン・マルコの長であるらしい者」と第三者のように登場させられているだけである。しかもそのサン・マルコ修道院は、送り先からも除外されている。（傍点は引用者）

さらに文中では、「汝らと汝らの〔下の〕全員に、汝らの教会で、祝祭日、多数の民衆が出席している場得上記の修道士ジローラモは破門されたと公表、宣言するよう命ずる」と明記されている。「汝ら」とは、無論、これが届けられた強い反ジローラモ派の教会のメンバーである。こうした者たちは、この命令を受けただけで歓喜し、これを大々的に宣伝することは必定だろうに、この命令に服さない者はジローラモと同様の「破門に処する」とも附記されている。

やはりこの勅書は、教皇自身の明確な、そして断固たる意思で、反サヴォナローラ意識の強い教会にのみ宛てられ、送られていたのである。だからこそ、受け取った教会当事者たちは、命令通りに大々的に宣伝したのである。

先にもふれたが、破門状とはこういうものなのだろうか？ 破門当事者ではなく、その者が排除されることを願い、かつ喜ぶ者たちに宛てられるものなのだろうか？ それともこれは特異なものなのだろうか？ 管見の限り、当時の年代記作者、歴史家たちも近・現代のサヴォナローラ研究者たちも、ほとんど

がこの件について何も語っていない。これが不思議なものとも特異なものとも感じられないからなのだろうか？　こういう教皇がこういう情況でこういう策を弄するのは当然と無意識に感じられているからなのだろうか？

ただし、本稿でしばしば参照してきている一九世紀末の代表的サヴォナローラ研究家ウィツラリ（だけ）は、「修道士ジローラモ・サヴォナローラと称し……」と書かれている点を挙げながら、この勅書の「内容も形式も同様に特異だ」と述べている。貴重な指摘である。<sup>(4)</sup>——勅書のこうした書き方や配布先の選別における「特異」さは、教皇の周到な目論見から生じたはずである。彼は、破門が、当事者サヴォナローラやその周囲に知られる前に世に周知され、既成事実化されることをねらっていたのだろう。二年前、九年九月の勅書発送の時と同様の手法である。（参照、↓XII章）

破門勅書の公開は、市内に大きな影響をおよぼした。これまでサヴォナローラのくり返しての説教の下で、化粧や身なりを思うようにできかねていた者たちが、多数、思い切り華麗、華美な姿で市街に表われるようになった。一カ月たらずで、市内は数年前のロレンツォ「豪華公」支配下の状態にもどったかのようになった<sup>(5)</sup>。——数年後のこの時は、ランドウツチの記述に見たように、市内では日々、食料不足に加えて悪疫で多数の死者が出、死体が散乱しその収集に追われていた。その中で、華美、華麗な姿で市街を闊歩する多数の者が見られたというのである。

加えて、反サヴォナローラ派の者たち、とりわけコンパニヤッチなどは、「政庁」やその下の行政当局の規制を受けることがなくなり、サヴォナローラ派には思うがまま乱暴を働き、いたる所でサヴォナローラ誹謗の

言辞をふりまいた。他方で卑猥な詩作、歌詞、サヴォナローラが説いた教義をのろう言説、などが多数、匿名で公表された。さらには反対派の修道院の修道士たちが、フィレンツェの守護聖人ヨハネの記念の式典（六月二四日）に、サヴォナローラの下の修道士たちが出席するなら自分たちは出席しない、と「政庁」に抗議し、結果的にこの日、サン・マルコとフィエゾレのサン・ドミニコの両修道院の修道士たちは、それぞれの院に閉じこもらざるを得なくされたという。<sup>(46)</sup>

こうした中で、彼は破門勅書への反論を文書で発する他なかった。早くも勅書公開の翌一九日ないし翌々二〇日、「新たに下された虚偽の破門への反論書簡、すべてのキリスト信徒にして神に愛された者たちへ」<sup>(47)</sup>を公表した。

この内容を見る前に、あえて、信奉者ランドウッチのこれに関する記述を見ておこう。当の二〇日、こう書いている。――「ジローラモ修道士が破門からの防衛の書簡を発表した。何人かの人によると、自己防衛の書簡だそうだ」<sup>(48)</sup>。しかしランドウッチは、どこで、どういうふうにしてこうした書簡が発表されたのか、また「何人かの人」の話をどういう場で聞いたのか、などは書いていない。

ともあれ、書簡の内容はまさに必死の自己弁明、防衛である。勅書は悪しき者たちからの偽りの情報に基づくものだという、これまでくり返してきたことに基づいて自分の無実を、すなわち前年十一月の勅書によるドミニコ会修道院再編成命令への不服従という事実はなかったことを、懸命に主張しようとしている。教皇に偽りの情報を送り続けている者たちが非難しているような、「聖なるローマ教会への不服従」ということはなかった。教皇の命ずる新たな「トスコ・ローマナ修道会」への帰属に同意しなかったのは、サン・マルコ修道院の

修道士全員の意思によるもので、自分がそれを否定することは規則上、不可能であると、長々と説明している。のみならず、自分は「今この時まで聖なるローマ教会にも、教皇にも、私のいずれの上司にも服従しなかったことはない」と明言している。

さらに加えて原則論を展開している。――「ある者たちが、明白に神に逆らう事がらに従わない場合も不服従だと思っていることは事実だ。しかし、我々はどんな事であれ自分の上司たちに服従せねばならないというのは間違いだ。なぜなら、我々の上司は神性を有している場合に限って上司なのだ。神に逆らうことを命ずる場合は、彼は神性を有しておらず、我々の上司ではないからだ」。 (傍点は引用者)

ここで彼は、(一見、細かいことのようにではあるけれども)、初めの上司一般を語る所では「上司たち」「superiori」と複数で言い、次に神性を有している上司、有していない上司という、条件つきの上司を言おうとする所では「上司」「superiore」と単数で言っている。そして、神性を有していない「上司」はもう「我々の上司」ではないと明言している。

この単数の最後の「上司」は、明らかに教皇アレクサンデル六世を指し、この一文は、彼は神性を有していないのだからもう「我々の上司ではない」、彼に服従しないとしても「神への服従義務」違反の罪に問われることなどない、と示唆していると思える。彼は、内心では明確にそう叫んでいたのだろう。

しかし彼はそれを声に出すことはできない。文字で表明することはなおできない。いきおい、書簡での結論は屈折したものになる。

「我々の敵は何と厚顔なことか。恥知らずにも教皇に明白な嘘をあれこれ伝えている。それゆえ、このような破門は効力の無いものなのだ。聖なる教会の意図するものではないのだ」。――悪いのは教皇でも教会でも

ない、市内の敵どもだというのである。

実に苦心の弁明という他ないだろう。破門処分が無効だと断言し、その根拠となる原理も明言してこの処分から身を守ろうとしながら、同時に、この処分を発した大きな存在を「教皇」と一言で指摘すれば自分に降りかかるだろう更なる処分からも身を守ろうとすれば、反撃の対象を、教皇に嘘を伝えている者たちという、小さな存在にしぼる他なかったのだろう。

ランドウッチがこの書簡を「自己防衛」の書だと言うのも、当然である。小さな存在といえれば自分も所詮は大組織の一端に位置する小さな存在でありながら、当の組織の頂点に立つ大権力者の有りようそのものに反撥を覚えずには、しかもそれを弾効せずにはいられない者の苦衷が、そして同時に悲哀が、ここにもにじみ出ているように思える。

確かに、教皇からの新修道会への帰属命令に従わなかったのは、サン・マルコの修道士全員の意思によるものだった。これは事実である。しかし、彼はもうとうに、教皇は「我々の上司」に値する者ではないと思いかつそうした趣旨のことを説教でくり返し暗示してきた。明言はできずに暗示してきた。

この書簡では、見たように不服従についての原理論をあえて公開している。それなのに、結論になると原理論から急にそれ、悪いのは「教皇に明白な嘘」を提供してきた「我々の敵」だ、この敵が悪いからこの破門勅書は無効だ、と言う。教皇はもうとうに我々の真の上司ではないから、その教皇が下したこの破門は無効だ、と簡潔明瞭に言いたいのに言えなかったのである。

しかし、この苦心の文書が市内で広く市民の心を動かすということは、ほとんどなかったのではないか。そもそもランドウッチのような信奉者でさえ、これを正統な反駁書という意味合いの言葉で表現せず、「自己防

「衛の書簡」と書いているのである。そう「何人かの人」が話っていたというのである。

この書簡の五、六日後、二五日、サヴォナローラは教皇に書簡を送っていた。破門勅書の撤回を直訴する決心をしたのかと思われるのだが、まったくそうではない。

この書簡も、(少し前で見たと)五月二〇日の書簡同様、「教皇聖下、その御足に口づけした上で」、と語りかけている。そしてその後は、長くはない文書全体で、新・旧約聖書のそちこちから文章や語句をふんだんに引きながら「信仰」の力を語っている。――信仰する「正しき者」は「どんな苦難にもねばり強く耐えるばかりか、不幸の中で栄誉を得ます」、「正しき者とは、まことに、信仰に生きる者です」。……加えて強調する。――「悪しき者には平安はない」「イザヤ書」四八―22、「神に愛される正しき者には「憂いはすぐ喜びに変わる」」「ヨハネによる福音書」一六―20」。

まるで聖書の言葉の基本を教皇に説いているかのようである。お前にはこういう基本から説かねばならないのだ、と内心で思いながら書いていたのか。あるいは、今こそこの人物に基本を説き聞かせ、自身の日頃の有りようを悔い改めさせる時だと思っていたのか。

というのも、この書簡の日付の一日前、一四日に教皇の長男、ガンディア公ジュアン・ボルジアが何者かによって殺され、遺体がローマの教皇庁の近くを流れるテヴェレ川に浮かんでいたのである。そして、犯人は弟で枢機卿チエーザレ・ボルジアだという噂がまたたく間に広がり、確かなことだと信じられた。しかも、教皇一家、一族によくある権力争い、この場合は兄弟間の権力争いの結末だと、容易に信じられたからである。おそらく、サヴォナローラはこの情報を得てこの書簡を書き、教皇に送ったのだろう。書簡の結びは、

――『慰めに満ちたる神』『コリント人への第二の手紙』一―3、『永遠の契約の血による羊の大牧者

わたしたちの主イエス・キリストを死人の中から引き上げられた神が』(『新約聖書「ヘブル人への手紙」一三―20』、『あらゆる艱難の中にあるあなたを慰めて』(『同「コリント人への第二の手紙」一―4』)下さいますように。ご機嫌よろしう)――、である。

「聖下の息子にして僕 修道士ジローラモ・サヴォナローラ 自筆にて」、との署名が附されているこの書簡に、教皇は何を感じたのか? ……他方サヴォナローラは、教皇を慰め、悔い改めさせることだけを願ってこれを書いたのか? これが何らかの事を生み出すよう、すなわち、自分が真つ当な、正統なキリスト信徒であることを教皇に感じさせ、自分に対する教皇の思いを改めさせるきっかけだけでも得られるよう、かすかにはあれ願っていなかったか? こうした願いも、こうした書簡をこの時点で教皇に送る動因となっていたのでは? という疑問も、そう的是はずれとは言えないのではないかと思える。

書簡が実際に何か事を生み出したのかいなかは、不明である。おそらく、何も生み出さなかったのだろう。そのためなのか、この書簡についてふれている著作は、古今を問わず少ない。

ただし、ローマから伝わってくる教皇一家のこの事件の情報を逐次、見聞していただろう年代記作者ナルディが書いているところでは、教皇は確かに相当の衝撃を受け、憔悴、消沈し、数日は引きこもって会うべき者たちにも会わずにいた。だが急に動き出した。内心ではかっっていたことがあったのだ。周囲に、自分はこれまでの自分の生き方を変えたと思わせよう、信じさせよう、……他者には正しい行動を、教皇庁とすべての教会には改革を命ずるだろうとも思わせよう、信じさせようともしていたのだ。こうまともに思った、信じた者たちがいた。そう命じられた際のその実現方法を考えさせた者たちさえいた。しかしそう日も経ないうちに、教皇は元の日常にもどった。すべてが無駄になった。<sup>30)</sup>

教皇は一段とひどく放蕩にはまり、自分の息子の件にサヴォナローラが厚かましくも言いおよんできたことに腹を立てさせたと報告している書簡もあるという<sup>(51)</sup>。

サヴォナローラは、ローマ教皇庁にいた自分に好意的な者たちから、この事件直後の教皇の素振りなどについて急報を受け、それを信じた者たち同様の無駄な好意的推測に基づいて、慰めと励ましの書簡を教皇に送ったのか？ 仮にそうだとしても、やはり、なぜ送ったのかというすぐ前の疑問にもどることになる。

おそらくこの書簡を送ってすぐ、六月末、彼は休むことなく、日付を記さない書簡、「最近下された破門宣告への反論」<sup>(52)</sup>を公表した。先の「自己防衛」に続くものではあるけれども、内容は単なる防衛ではなくなっている。神学者の見解を引用しながら、かつ、この世紀初めのコンスタンツ公会議（一四一四年）とそれに次ぐバーゼルの公会議（一四三一年）の決議を巧みに引照しながら、破門勅書に反論している<sup>(53)</sup>。

冒頭、「先日、我々が不当だと証明したような破門は、少なくとも公的には遵守されねばならないものなのではないか、と汝は私に問うている」、と問題の核心を提起する。そしてそれに、彼が正統と認める学者や聖職者の見解を引いて答えていく。結論はこうである。

聖職者たちの不当な宣告に従う必要はない。どんな宣告にも服さねばならないというのは、「ロバの忍耐と野ウサギのバカな小心」というものだ。……「どんな厳しい非難にも服さねばならないと信ずるのは、無知ゆえなのだ」。しかし無知、無思慮な者が増えている。彼らは「我々の修道院（＝サン・マルコ）に来る者、我々に話しかける者はすべて破門容疑者とみなされると断言している」。……同じく無知、無思慮から、「私と話しを交わす者や我々の修道院に来る者を避ける」と説教する者たちがいる。彼らは無知なのだ。教皇マルティヌ

ス五世がコンスタンツの公会議で、またその後も、信仰心の深い者は破門された者を避ける必要はほとんどないと定め、かつこれがバーゼルの公会議で再確認されていることを、彼らは知らないのだ。

「しかし」、自分の院の者たちは今、こういう「まったく愚かな無思慮、無知に乱されている」ため、「私は、より重大な事について述べることができない」、とこの書簡を結んでいる。

これとほぼ同時に書かれた先の教皇宛の書簡とは、あまりに異なる一般公開書簡である。自分への破門は不当だ、これに服する必要はないと、学者の見解や公会議の決議を基にして、これまで以上に強気に断言している。同時に、破門宣告の影響にさらされている状況を、正直に語ってもいる。彼自身にも、修道院にも近づく者が少なくなっていたのだらう。市街での反サヴォナローラ派の言動は日々、激しくなり、サン・マルコを訪ねるのも安全ではなくなっていたからである。

コンパニヤッチのような暴力的集団ではなくても、アツラツピアーティをはじめ反サヴォナローラ派は、彼の非難、行動妨害、彼自身の排除、等々あらゆることを、彼が被破門者であることを口実にしてできるようになっていた。無法者と化し、危険な存在になっていった。また彼らは、フィレンツェが、彼の言動を自由にさせていることを理由に破門とまではいなくても聖務禁止にでも処されれば、都市〔国家〕の経済は成り立たなくなる就叫んでも、それを否定、排除されることもなくなっていた。党派的ではない多くの者も、同様の不安を覚えていたからである。

サヴォナローラ派は変わらずサン・マルコ修道院に通っていたが、そこでサヴォナローラが、——反対派に言わせれば被破門者が——執り行なった祭礼はなかったことにしていたという。

彼が書簡で、「まったく愚かな無思慮、無知に乱されて」、と書いているのは、両派のこうした実態とそれに

関わる配慮、警戒に常に追われていたということをも含んでいるのだろう。

しかしこうした中で二五日、七―八月の執政委員選出の結果、「政庁」をサヴォナローラ派が占めた。その下の各行政委員会も同様になった。反対派が街頭でもどこでも目立った動きを続けていたのに対し、サヴォナローラ派は目につかないところで着実に活動を続けていたのだろう。新「政庁」も関係行政委員会も、すぐ教皇（庁）へ破門撤回を働きかけ始めた。しかしサヴォナローラには、忍耐の中で著述に励む日々が続く。

## 註

- (1) Pseudo Burlamacchi, *Op. cit.*, pp. 118-123; R. Ridolfi, *Vita, cit.*, pp. 224-225.
- (2) Pseudo Burlamacchi, *Ibid.*, pp. 129-131; R. Ridolfi, *Ibid.*, p. 277.
- (3) ボッティチェッリは、当社のフィレンツェの代表的芸術家で、サヴォナローラに深く影響を受けた文人・芸術家の代表例としてよく論じられてきた。その中で、彼が自作をみずから焼却したという点は疑問視されてきているようだ。但し、この註(3)ですぐ示すような注目すべき見解もある。
- 念のため著名な論評を挙げておこう。――ルネサンス・フィレンツェの代表的な美術家・建築家で美術家伝の作者ジョルジオ・ヴァザリ(1511-74)によると、彼は「サヴォナローラの党派に組んで、そのためにしまいには絵筆さえ捨てたから、生計をたてる手段がなくなり、非常な困難状態におちいった。……熱烈にサヴォナローラの党を支持し、(当時世間で呼ばれていた)ピアニョーネ……になり、自分の仕事は全然顧みなくなってしまったのである。それでしまいには年をとって貧しい境涯におちいってしまった」。『ルネサンス画人伝』、平川祐弘、小谷年司、田中英道訳、白水社、一九八二年、

一二三頁。Giorgio Vasari, *Le vite dei più eccellenti pittori, scultori, e architetti*, a cura di G. Licia e Carlo L. Ragghianti, II, Milano, 1973, pp. 436-437. 訳文中のカッコはここに記した原書に従って引用者が追記。) なお、この原書の編者は脚註で、ボッティチェリが「ピアニョーネだったことは歴史上、確認されていない」と指摘している。訳書にはこうした註は無い。それよりも読者が注意すべきなのは、訳者代表が長い「あとがき」の中でさらりと書いているのだが、これは「あくまで『列伝』の中のもっとも興味深い画人を翻訳、紹介することに主眼をおいた」訳書だ、つまり「あくまで」抄訳書だということである。——原著者ヴァザーリは、視野も「興味」の範囲も、もっと広がった。彼の名誉のためにあえて言うなら、訳書のタイトルは、正確に、『ルネサンス画人伝(抄)』とでもすべきではないかと思われる。なおこの書の全訳の試みがようやく始まり、全六巻のうち第一、第三、第四の三巻が刊行されている(中央公論美術出版、二〇一四、一五、一六年)が、その中にボッティチェリはまだ含まれていない。

一九世紀後半のイギリスの文芸・美術評論家ウォルター・ペイター(1839-94)の代表的著書『ルネサンス』によれば、ボッティチェリは「……晩年サヴォナローラの影響を受け、一種の宗教的憂鬱症に陥って、ほとんど人目を避けて過ごしたらしい……。これは公認された年代によれば、一五一五年の彼の死までつづいた。……(傍線は引用者)」(富士川義之訳、『ウォルター・ペイター全集』1、筑摩書房、二〇〇五年、四一頁、Walter Pater, *Renaissance: studies in art and poetry: the 1893 text*, edited, with textual explanatory notes, by Donald L. Hill, London, 1980, p. 40.)

但し傍線部分は、正しくは、一五一〇年である。——なおこの点について著者はすく、「何か文書が世にあらわれて、彼の死んだ日がもっと早かったことを確定し、彼のことを考える場合にその意気阻喪

した老年時代を思わずによいものを(「思わなくてもよくしてくれるように(引用者補記)」と希うばかりである」と、と附記している。現在、歿年は一五二〇年と「確定し」ているようなので、著者の好意的希望はかなえられている。

二〇世紀のポッティチェリ研究で、(その素人ではあるがサヴォナローラに関心のある者には)代表作の一つと言えるのではないかと思えるのは、日本人による大著、矢代幸雄『サンドロ・ポッティチェリ』(吉川・摩寿意監修、高階・佐々木・池上・生田訳、岩波書店、一九七七年。―訳者によると原著は *Sandro Botticelli*, London, 1929, である。これは全体を通じて終始、サヴォナローラに関わる問題を考察している。たとえばヴァザリの見解について、「メディチ家の取り巻きの一人としてヴァザリに先入主があり、これが彼をしてサヴォナローラの事件に対して対立的姿勢をとらせたらしい……」と述べ(七五頁)、自作焼却の件については、「私はポッティチェリの古典的主題の素描がきわめてかぎられていることと、裸体素描が現存しないことは、それらがサヴォナローラの影響で焼却されたからだと考えたいのである」としている(三二―三三頁)。自作焼却に関してこのように推論の根拠を具体的にあげて語っているのは、管見の限りではあるけれども、サヴォナローラ研究には無いように思える。(傍点は引用者)

さらに、「第四部 神秘的ポッティチェリ」、すなわち全体の第十二章(二〇五―三四六頁)は、サヴォナローラの影響を主題として論じている。この内容は、サヴォナローラ研究自体にも欠かせないものだと思う。

現在の美術史家たちも、内容のレヴェルや分量の違いはあるものの、多少ともこの件にふれている。

一般的な作品紹介書で比較的真つ当に考察していると思われるものとして、バルバラ・ダイムリング『サンドロ・ボッティチエッリ』Mariko Nakano 訳、タッシェン・ジャパン（株）、二〇〇一年、六六―八九頁、Barbara Deimling, SANDRO BOTTICELLI 1445 – 1510, 1994, pp. 67-74, があ<sup>89</sup>。

(4) P. Villari, *Op. cit.*, seconda ediz., vol. I, cit., pp. 514, 517-519.

(5) E.N.-*Prediche sopra Esecchiele*, vol. I, cit., pp. 129-139.

(6) この経緯を簡略に解いているものとして、ジャック・シユッセ『旧約聖書ものがたり』、船本弘毅監修、創元社、一九九七年、一七四―一八三頁、がある。

(7) 木田猷一監修、『新共同訳 旧約聖書略解』、前掲、六六四頁。

(8) E.N.-*Prediche sopra Esecchiele*, vol. I, cit., pp. 183-193. なお本稿で底本としてこのサヴォナローラ全集 (E.N.) では、このタイトルの一文はなぜか「エゼキエーレ書」第二章と記されている。しかし参照しているイタリアおよび日本の聖書では、これは第一章の末尾に出ている。但しこの説教の本文は、すべて第二章に関するものである。

(9) R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 279.

(10) Cfr. P. Parenti, *Op. cit.*, vol. II, pp. 78-79.

(11) R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 281.

(12) P. Parenti, *Op. cit.*, vol. II, p. 79.

(13) 二月の三回の説教は、E.N.-*Prediche sopra Esecchiele*, vol. I, cit., pp. 337-386, に、三月中および五月四日の説教は、E.N.-*Prediche sopra Esecchiele*, vol. II, a cura di R. Ridolfi, Roma, 1955, pp. 1-371, に、それ

をねり収録をせしむる。

- (14) E.N.-*Lettere e Scritti Apologetici*, cit., p. 144.
- (15) Chr. R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 282. 但しⅩ章ではこの人物の氏名を記さなかつた。
- (16) Chr. *Ibid.*, p. 290.
- (17) Chr. J. Schnitzer, *Op. cit.*, S. 412: Nuova ediz. cit., p. 465.
- (18) R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 283.
- (19) E.N.-*Prediche sopra Ezechiele*, vol. II, cit., pp. 179-196.
- (20) A. Gherardi, *Op. cit.*, pp. 153-154.
- (21) *Ibid.*, pp. 154-156.
- (22) P. Parenti, *Op. cit.*, vol. II, pp. 80, 93; R. Ridolfi, *Vita*, cit., pp. 287-288.
- (23) I. Nardi, *Op. cit.*, pp. 95-97; R. Ridolfi, *Ibid.*, p. 288-290.
- (24) P. Parenti, *Op. cit.*, vol. II, p. 100; R. Ridolfi, *Ibid.*, p. 290.
- (25) 布告原文は P. Villari, *Op. cit.*, vol. II, pp. xxxv-xxxvj. ヲ記スルニ付テハ R. Ridolfi, *Ibid.*, p. 18; R. Ridolfi, *Ibid.*, p. 290.
- (26) R. Ridolfi, *Ibid.*
- (27) P. Villari, *Op. cit.*, seconda ediz., vol. II, p. 19; R. Ridolfi, *Ibid.*, p. 291.
- (28) P. Villari, *Ibid.*, p. 18; R. Ridolfi, *Ibid.*, pp. 290-291.
- (29) 布告原文は P. Villari, *Ibid.*, p. xxxvij. ヲ記スルニ付テハ R. Ridolfi, *Ibid.*, p. 18; R. Ridolfi, *Ibid.*, p.

- (30) P. Villari, *Ibid.*, pp. 18-19.
- (31) E.N.-*Prediche sopra Esecchiele*, vol. II, cit., pp. 351-367.
- (32) Pseudo Burlamacchi, *Op. cit.*, pp. 106-109; P. Parenti, *Op. cit.*, vol. II, pp. 100-103; I. Nardi, *Op. cit.*, pp. 99-100; L. Landucei, *Op. cit.*, pp. 147-148. (前掲日本語訳「一五九—一六〇頁」; P. Villari, *Op. cit.*, seconda ediz., vol. II, pp. 21-23; J. Schmitzer, *Op. cit.*, S. 409-410; Nuova ediz., cit., pp. 457-458; R. Ridolfi, *Vita*, cit., pp. 292-293.
- (33) R. Ridolfi, *Ibid.*, pp. 293-294.
- (34) E.N.-*Lettere e Scritti Apologetici*, cit., pp. 256-264; *Selected Writings of Girolamo Savonarola*, cit., pp. 290-294.
- (35) L. Landucei, *Op. cit.*, p. 149. (前掲日本語訳「一六〇頁」)。
- (36) P. Parenti, *Op. cit.*, vol. II, p. 113.
- (37) L. Landucei, *Op. cit.*, p. 150-155. (「」)の「」をめぐり日本語訳書を掲出しない。原文の基本部分の解釈に同調「」が「」である。前章の註(35)と同様である)。
- (38) *Ibid.*, pp. 152-153. (前掲日本語訳「一六二—一六三頁」; R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 301.
- (39) G. Savonarola, E.N.-*Lettere e Scritti Apologetici*, cit., pp. 149-151; G. Savonarola, *Apologetic Writings*, edited and translated by M. Michele Mulchahay, (I Tatti Renaissance Library, Harvard Univ. Press), Cambridge, Massachusetts, London, 2015, pp. 84-89. (「」の書「編訳者は「左頁にラテン語原文」右頁

に英訳文を、まことに一文一文対訳形式で収録している。実に稀有で有りがたい良心の書である。但し、あえて欲を言ふなら、収録文書がもう少し多ければと残念に思われる)。 *Selected Writings of G. Sanonavola*, cit., pp. 295-296.

- (40) Chr. R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 299.
- (41) 参照 → 上の註 (38)。
- (42) P. Parenti, *Op. cit.*, vol. II, p. 112.
- (43) P. Villari, *Op. cit.*, vol. II, pp. 28-29, (勅書原文は) pp. xxxi-xl, 上のイタリア語全訳は I. Nardi, *Op. cit.*, pp. 103-104. (スルビ) 編者 Agenore Gelli によって註として訳出・収録されている。当時のフィレンツェで生きた作者による年代記の叙述で用いられている資料について、その全体を、一九世紀半ばの編者が俗語に翻訳し註として附記するというのも、実に稀有な、そして貴重な有りがたい配慮である)。
- (44) P. Villari, *Ibid.*, p. 28.
- (45) *Ibid.*, p. 31.
- (46) I. Nardi, *Op. cit.*, p. 104; P. Villari, *Ibid.*
- (47) E.N.-*Lettere e Scritti Apologetici*, cit., pp. 271-276.
- (48) L. Landucci, *Op. cit.*, p. 163. (前掲日本語訳「一五三頁」)。
- (49) E.N.-*Lettere e Scritti Apologetici*, cit., pp. 161-162; *Selected Writings of G. Sanonavola*, cit., pp. 301-302.
- (50) I. Nardi, *Op. cit.*, pp. 105-106.
- (51) Chr. P. Villari, *Op. cit.*, vol. II, pp. 38-39

- (52) E.N. - *Lettere e Scritti Apologeticii*, cit., pp. 277-282; *Selected Writings of G. Saonmarola*, cit., pp. 303-307.
- (53) P. Villari, *Op. cit.*, vol. II, pp. 32-33.
- (54) R. Ridolfi, *Vita*, cit., p. 303.

(以下、  
続載)

